
ハヤテのごとく！～執事とお嬢様の恋物語～

銀風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！〜執事とお嬢様の恋物語〜

【Nコード】

N4235Q

【作者名】

銀凧

【あらすじ】

この物語は三千院家執事、綾崎ハヤテとそのお嬢様、三千院ナギの恋物語を書いた小説である。ハヤテのごとくに関係ない銀魂やワンピースも出てくるがそこは気にしないでください。

第1話：白皇にて（前書き）

新作連載、始まりはじまり

新八「いいんですか？ どんどん新作を書いてって。」

マリア「まだ血桜忍びとかあるのに……。」

作者「……何とかする！」

第1話：白皇にて

小鳥のさえずりが朝の空に響く。だがそんな中でも起きない少女がいた。少女の名は三千院ナギ、三千院家のお嬢様である。

「はあ・・・一体いつになったら起きるのやら・・・。」

ため息とともにこう言ったのはメイドのマリアである。三十路っぽいが本人いわくピッチピチの17歳だそうだ。

「ハハハ・・・いつもの事ですよ。」

そう言ったのはナギの執事である綾崎ハヤテ。彼はクリスマスの日にナギを誘拐しようとしたがまーいろいろあってナギを助けて、その流れで執事となったのだ。

「ハヤテ君、ナギを起こしに行ってくれませんか？」

「分かりました。」

ハヤテはこう言うとなぎの寝ている寝室に向かった。

「お嬢様、起きてください。お嬢様。」

「うゝん・・・あと5分。」

「とにかく起きてください。今日は学校へ行きましょう。」

「いゝやゝだゝ。いゝきゝたゝくゝなゝいゝ。」

ナギは駄々をこねるばかり。そんな中、チャイムが鳴った。誰だろうと思ったがまずナギの事を先だと思い寝ているナギを何とか起こそうとしていた。

「お嬢様、とにかく起きてください。」

「オメーも朝からご苦労なこつたなー。」

「そうですね、なかなかお嬢様が起きな・・・エエエエエ！」

ハヤテは驚いて後ろを見た。そこには知り合いの坂田銀時が立っていたのだ。

「銀さん、どうしてここに？」

「いやねー、クラウドに頼まれて水道管を直してくれって連絡があったからここに来たんだ。」

「へ・・・へー。」

「何だうるさいぞハヤテ。人が寝ているのに大声を出すな・・・つて銀さん。」

「よー。ようやくお目覚めか。お嬢様。」

「あ・・・ああ。」

「まー俺は今日一日ここにいるから安心して学校へ行って来いよー。」

「銀時はそう言っただけで部屋から出て行っただけ。」

ハヤテとナギは通学路を歩いていた。

「あゝかつたるい。何で学校に行かなくてはならないんだ。」

「仕方ないですよ。お嬢様。」

「むーと言いながら歩くナギ。そんな中、ある人物がハヤテの後ろからやってきた。」

「おはよう！ハヤテ君！」

「あーハムスターか。」

「誰がハムスターかな？」

そう言ったのはハヤテに恋しているハムスター、西沢歩である。

まあ簡単に言えばナギにとって恋のライバル&友人だ。

「おはようございます。西沢さん。」

「まさか会える何とんでもなかったよ！」

「それはよかったな。」

「私はよくないけどな。」

しばらくして誰もが口を閉じた。そして気付いた。

「ルフィさん！何でここにいるんですか！」

いつの間にかハヤテと西沢の間にルフィがいたのだ。

「よー、暇だからここに来たぜー。」

「いいんですか！ここに来ても！」

「さあ？」

とまあこんな感じで白皇へ着いたハヤテ達。ちなみに西沢は別の学校なので別れました。校内を歩いていたら女生徒の声が聞こえた。「ん？どうしたんだろ？」

「行ってみよう。」

ハヤテ達は校内の奥へ進んだ。そこにはメロリンモードのサンジが女生徒をナンパしまわっていたのだ。

「何やってんだあいつ。」

「さあ……。」

ハヤテとナギはルフイが「サンジを何とかする」と言っただで行ったん別れ、下駄箱に入って行った。ハヤテが自分の下駄箱を開けると中からとんでもない量の手紙が流れてきた。

「うわ……まだだ。」

「ったく、ハヤテは私の執事なのに……あいつら気付いているのか？」

ハヤテはとんでもない量の手紙を何とかバッグに入れて教室へ向かった。

「ええ！お姉ちゃんが二日酔いで休む！」

理事長室にて、今ここにハヤテのクラスメイトであるヒナギクと幼い頃のハヤテの恩人であるアテネが会話をしていた。

「ええ……昨日、教師同士で飲み会を行った時、無駄に飲み過ぎてダウンらしいわよ。」

ヒナギクはため息をついた。

「ったく……お姉ちゃんったら……。」

「はあ……どうしましょう……代理の教師はまだ決まってないの。」

「そう……一体どうすれば……。」

理事長室にてため息が響いた。

「え？先生が休む？」

ハヤテはクラスメイトである泉からこう聞いた。

「そうだよー。」

「二日酔いでダウンって聞いたぞ。」

「ったく、どうしようもないな。」

ここで生徒会3人娘が現れた。

「一体今日の授業はどうするのだ？」

「さあ？」

しばらくしてチャイムが鳴った。廊下の方から誰かが歩いてくる音が聞こえる。そして教室のドアが開かれた。その正体を見てハヤテとナギ、いやクラス中がビックリ仰天した。その正体とは。

「はい、テメーら席つけー。銀八先生の授業が始まるぞコノヤロ
ー。」

第1話・白皇にて（後書き）

感想とかお待ちしています！本当に待ってます、少なくてなんか寂しいので・・・。

第2話：白皇にて2（前書き）

作者「血桜忍の方も書かないと・・・ああ、混沌物語も最近書いてないし・・・どうすればいいんだアアアア！」

新八「・・・かなり困っているようですね・・・。」

マリア「ほっときましょう。」

第2話：白皇にて2

二日酔いでダウンした雪路に代わって来たのはあの銀八先生・・・というより銀時だった。ちなみにこうなったのは訳がある。数分前。

「ああ？白皇へ行って来い？」

「はい。」

三千院家にて、水道管の修理をしていた銀時はマリアにこう言われた。

「はあ？ふざけんなよ？俺が何を教えればいいんだよ？」

「とにかくお願いしますね。」

「ってかどうやってその情報を仕入れたんだよ。」

「それは企業秘密です。」

マリアがそう言った。だが銀時も反論した。

「それよりもよー、俺が何を教えればいいんだよ？（プーーーーー！）か？それとも（プーーーーー！）か？」

「銀さん、相手は高校生ですよ。」

「知ってらー、んな事。」

「なのに（プーーーーー！）を教えるってどんな神経ですか？」

「言っとくけど俺が何を教えればいいんだよ。」

「歴史辺りにしたらいいんじゃないですか？」

「・・・いいのかよ・・・。」

てな訳で修理を新八と神楽に頼み銀時は渋々と白皇へ行く事となった。

「てな訳で本日は銀八先生が授業をする事となった。」

「だ・・・大丈夫ですか？」

ハヤテは冷や汗をかきながらこう言った。

「多分な、では早速ジャンプの授業をする。今週の少年ジャンプの

NARUTOのとこ開け。」

「ジャンプなんて教科はありませんよ！」

「銀さん、一体どんな授業をするのだ？」

ハヤテの隣でナギは今秋のジャンプを取り出しNARUTOの部分を開いていた。

「お嬢様・・・いつの間に持ってきてるんですか？」

「偉いぞーナギ。テーマはご褒美として全教科補習なしにしてやる。」

「ジャンプを持ってきただけで！」

一部の生徒はいきなり席を立ち近くのコンビニへ向かった。

「うんうん、これだけジャンプへの情熱があるのか・・・先生はうれしいぞ。」

銀時は嬉しそうにこう言った。

「大丈夫かしら？」

自分の席でヒナギクは不安そうにこう言った。

ジャンプブックで盛り上がった1時間目、完全にハヤテやヒナギクを入れる一部の生徒は呆れていた。

「まさか銀さんが来るとは・・・。」

「というより大丈夫かしら、今日の授業。」

そんな会話をしていたらチャイムが鳴った。その直後、教室の扉が吹き飛んだ。そしてある人物が教室に入ってきた。その人物とは

「あれ？どこだここ？」

ゾロだった。

「ゾロさん！何であなたがここにいますか！」

「いや、お前たち行こうと思ったが・・・まさかあの道を曲がればよかったのか！」

ゾロはそう言った後窓から外へ出た。

「だ・・・大丈夫かな？」

「さあ？」

ハヤテとナギは不安になった。しばらくして数学の先生が来て授業が始まったのだが。

「あれ？またここに出ちまった。」

またゾロが来た。

「くっそ、お前っち動いてんじゃねーのか？ハ。ルの動く城みたいに。」

「動きませんよ！というより道ぐらい覚えましょうよ！」

「うるせーよ、まー邪魔して悪かったな。じゃ、また会つか。」

と言つてゾロはまた窓から外に出た。そして数分後。

「んん？またここに出ちまった。」

またまたゾロが来たのだ。数学の時間、これが約20回続いた。

「はぁ・・・本当に今日はいろいろと大変だ。」

「そうだな。」

白皇の庭、今ここでハヤテとナギは昼食を食べている。遠くからはルフィの「肉~~~~~！」の雄叫びが聞こえる。

「あ・・・綾崎先輩ッ！」

ここで一年らしき女の子がハヤテの所へ来た。

「何か用ですか？」

「こ・・・これ・・・これ差し入れですっ！」

と言つて女の子は手作りらしき弁当をハヤテに差し出した。

「あー！瑛子ずるい！」

「私だつて負けないんだから！」

その後、女子の軍団がハヤテに迫った。

「おわー！」

「ハヤテー！」

ハヤテはなすすべもなく女子の軍団にのまれていった。ちなみにこれは日常茶飯事であるがハヤテは未だに慣れていない。そんな中、ハヤテに向かって何かが突進をしてきた。

「ウオオオオオオオ！」

「さ・・・サンジさん！」

「何で俺よりモテモテ何だよオオオオオオ！」

サンジがハヤテ目がけて飛び蹴りを放った。だが女子の軍団のパワーであっさりやられてしまった。

「チクシヨ~~~~~！」

サンジは地面にたたきつけられてしまい気絶した。

（何だよ・・・ハヤテは私の執事なのに・・・）

騒動の中、ナギはこう思っていた。確かにハヤテは意外と女子からモテる（あと一部の男子からも）。しかしハヤテは私の執事、何であいつ等はその事が分からないのだ？ナギはいつもそう考えている。しかもハヤテはあまりその事を気にしていないみたいらしいのでこの光景を見るたびストレスがたまる。

「ハヤテ君は私の者だから手を出さないでよ！」

「何言ってるの！ハヤテ君は誰のものでもないよ！」

ギヤーギヤーギヤーギヤー！うるさくなってきた。そしてついにナギのストレスが爆発してしまった。

「ダアアアアアアア！ハヤテのバーカバーカバアアアアアアアアアアア力！」

ナギはそう叫んだ後、どこかへ行ってしまった。

「あ、お嬢様！」

ハヤテは何とか女子の軍団の中から脱出し、ナギの跡を追った。

第2話：白皇にて2（後書き）

作者「ここで言うのも何なんだけど混沌学院のアクセス数が50000を突破しました！ありがとうございます！」

新八「ていうか混沌学院の方でそれを言ったらよかったんじゃないですか？」

作者「黙れ眼鏡！」

新八「オメーも眼鏡装備してるだろうがアアアアア！」

第3話・白皇にて3（前書き）

作者「というわけで第3話」

マリア「これ本当に恋愛物語ですか？やけにギャグが混じって
いますけど・・・。」

作者「・・・ほっといってくれEEEEEEEEEE!!」

第3話：白皇にて3

ナギはハヤテから離れて一人学院の離れに座っていた。

「お嬢様、ここにいたんですか。」

後ろからハヤテの声が聞こえた。

「……………」

ナギはハヤテの方を少し見た後すぐにそっぽを向いた。

「機嫌を直して下さい。」

「……………」

「はあ」

「どうした？ついに振られたか？」

ハヤテがため息をついた時、銀時がやってきた。

「銀さん……………」

「何かあったのか？」

「ええ……………実は……………」

ハヤテは今さっきの事を銀時に話した。

「オメ……………モテモテなのかよ。」

「え？そうですかね……………僕でもそれは分かりませんけど……………」

首をかしげて言うハヤテの様子を見て銀時は心の中でこう叫んだ。

（こいつ……………天然だ！）

そんな中、ナギが立ちあがった。

「もういい、教室に戻る。」

「あ、待ってくだ」

「お前には一人で十分だ！お前には何もしなくても女が寄ってくるだろうが！」

ナギは泣きながらこう叫んだ。そしてハヤテはナギの気持ちを察知した。

「お嬢様、僕はあなたの執事です。」

ハヤテは営業スマイルを作ってこう言った。

「あの時言いましたよね、ずっとあなたのそばにいるって。」

「・・・うん。」

「僕はずっとお嬢様の事を考えています。僕がお嬢様の所から離れるなんてありません。」

「ハヤテ・・・。」

ナギはハヤテの所へ歩いて行った。そしてハヤテの右手をギュッと掴むみこう言った。

「だったら・・・一緒に教室へ行こう・・・。」

ハヤテは少しの間をおき笑顔で・・・。

「分かりました。」

と答えた。教室へ向かう二人の後ろ姿を見て銀時はこう言った。

「あれ・・・ただのバカカップルじゃね？」

午後の授業の数分前、ヒナギクはとんでもない事を知らされてしまった。午後の授業の教師達が急に具合が悪くなり早退したと。

「代理の人って・・・誰だろ？」

しばらくしてチャイムが鳴り響いた。その後、誰かが廊下を歩いてくる音が聞こえた。で、教室のドアが勢いよく開かれた。

「よし！皆いるなー？授業を始めるぞオオオオ！」

その声の主を見て誰もがビックリ仰天した。何故なら代理の教師とはルフィだったのだ。

「まず最初に聞きたい事がある！俺は一体何を教えればいいんだ！」

「って知らないんかいイイイイイ！」

クラス中のツツコミが教室中に響いた。

「よし！まーとりあえず宴だー！」

「いや、授業はどうするんですか！」

「そんなもん後だ後！肉と肉と肉を持って」

「待ちなさい！」

ルフィの暴走をナミが止めた。というよりかルフィを脳天チヨッ

プー発で倒した。

「ごめんね、うちのバカが変なこと言って・・・。」

「い・・・いいえ。」

ナミは気絶したルフィを廊下へ投げ、授業を始めた。

「いい？雲と言うのは簡単に言くと気体なの、ゲームとかで雲の上に乗れるって言うけどそれはあり得ない。雲の中は雷だらけよ。」

実際にナミは天候棒で雲を作って見せた。

「いい？これは私が作った雲だけど実際はこんなもんじゃないから。」

「またここかよオオオオオ！」

「糖分が足りないんだけどオオオオオオオ！」

「肉~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!」

遠くの方で3バカ（ゾロ、銀時、ルフィ）の声が聞こえた。

「・・・ちよつと待ってねー」

ナミは天候棒で巨大な雲を作りだし3バカ（ゾロ、銀時、ルフィ）にぶつけた。3バカ（ゾロ、銀時、ルフィ）は悲鳴を上げ気絶したがルフィだけは無事だった・・・だがナミに一撃により沈んだ。

「はぁ・・・今日は疲れましたね。」

「ああ。」

ハヤテとナギは夕焼け空の中、帰宅していた。あの後、サンジが女生徒にナンパしたのはいいがすべて失敗に終わってネガティブになるしブルックがやって来て皆驚いているし神楽が定春に乗ってやって来て何か色々と暴れまくるという事が起こり何か色々と大変だったのだ。（それ以上にヒナギクとアテネが大変だったのだ。）

「でもどうでしたか？たまにはいいでしょ、学校に行くのも。」

ハヤテは笑顔でナギにこう言った。

「あ・・・うむ・・・たまにはいいな・・・こう言う事も。」

「じゃ、また明日も」

「明日は休む！何が何でもな！」

その後、夕日が二人の影を優しく照らしていた。

一方三千院家にて。

「あの・・・水道管はどうなるんでしょう？」
壊れた水道管を前にクラウスはただ困り果てていた。

第3話：白皇にて3（後書き）

作者「感想を待ってます！」

新八「それ当たり前だから。」

作者「……………」

第4話：白皇文化祭（前書き）

新八「これって・・・本当に恋愛ものですか？」

マリア「くらだないネタがあちらこちらに・・・今すぐジャンルを
コメディーにした方が」

作者「これは恋愛ものだあああああ！・・・一応。」

第4話：白皇文化祭

秋風（これを書いているのは1月だけど）が冬が近い（というよりこれを書いている時は冬だけど）事を知らせている。秋の季節、食欲の秋だ、読書の秋だとか言われているがもう一つ重要な事がある。文化祭である、この季節どこの学校でも文化祭はやるものである。桜ヶ丘高校でも麻帆良学園でも混沌学院（皆見てねー！）でもやっている。それは白皇でもそうである。

「ったくよー、何で文化祭とかめんどくさい事をやんなきゃいけないだよ。中止にしる中止に。」

いまだに体調が治らない雪路に代わって先生をやっている銀八・・もとい銀時がこう言った。

「銀さん・・一応皆楽しみにしているのでそう言った発言は」

「オイオイ、そんなんではしゃぐのは子供か中2かバカしかいねーじゃねーか。いいか？今週はジャンプが土曜日に発売なんだ。だから俺はさっさとジャンプを買って」

「先生、真面目にやってください。」

ヒナギクが正宗を持って銀時にこう言った。

「しゃーねー、じゃさっさと決めるか。つーわけでメイド喫茶でいいか？」

「何でですかアアアアアアア！」

クラス中のツッコミが響いた。

「何でって・・オメーっちクラスって結構ランクが高い奴いるじゃないか。ヒナギクだったりナギだったり泉だったり・・何ならハヤテ、オメー女装しろ。」

「嫌ですよ！」

「いいじゃねーか。話聞いたぞ、オメーの女装はかなり人気あるって。裏でファンクラブいるみてーだぞ。」

「誰ですか、そのフアンクラブの代表」

「ハヤテエエエエエエエ！皆の為だアアアアア！女装してくれエエエエエ！」

ここでハヤテが好きな・アレな男、虎鉄が叫んだ。ハヤテは無も言わずにそのバカ（虎鉄）を窓から投げ捨てた。

「まー文化祭まで時間がある、クラスで何やるか決めとけよー。じや今日はこれまで。」

銀時はこう言って教室から去って行った。

ハヤテとナギは屋敷に帰り、ゆつくりとしていた。

「なあハヤテ、文化祭って何やるんだ？」

「さあ？・・・というよりお嬢様は参加しなかったんですか？」

「ああ、去年はサボってモンハンをやっていた。」

「・・・・・・・・・・。」

ハヤテが心の中で呆れている時、マリアが部屋にやってきた。

「そう言えばハヤテ君って白皇の文化祭って知りませんでしたね。」

「はい。転校してきたのが1月なので。」

「結構豪華ですよ。有名な人が来たり出店も結構出るし」

「その話・・・マジですか？」

マリアの話をどこで聞いていた分らないが銀時とルフィが現れた。

「おい！肉屋は出るのか！」

「ま・・・まあ一応。」

「おい・・・綿菓子とかりんごあめとかチョコバナナとか・・・とにかくいろいろと出るのか！」

「ま・・・まあ一応。」

マリアから話を聞き銀時とルフィはハイテンションになった。

「うっしやー！普段文化祭とかクソ喰らえとか言ってたけど今回は文化祭じゃねー！糖分祭りじゃアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！肉が俺を呼んでいるうウウウウウウ！」

奴らは大声をあげて去って行った。

てな訳で数日後、ハヤテのいる教室内で何やるかを決めていた。メイド喫茶やらお化け屋敷やらライブとかゲストで放課後ティータイム呼べとか色んな声が聞こえてきた。

「はいはい！皆静かにー！」

ここで数日の間でいつの間にか復帰した雪路がこう言った。

「結局何やるか決ままないわけ？だったらメイド喫茶開いてガツポリ儲け」

「お姉ちゃん、そんな事言わないの！」

「うるさいー！あの後治療費とかいろいろお金かかって大ピンチ何だから！」

「それはお酒を飲み過ぎたお姉ちゃんが悪いんですよ！」

「うわーん！何だよー！ヒナギクのペタンコー！」

「うるさい！とにかくお酒を控えなさい！お姉ちゃんが来るまで銀さんのサポートととかあつて疲れたんだから！」

「だったら私の方にもお金のサポート」

「しーま！せーん！」

ヒナギクと雪路の口げんかが始まった。その様子を見ていたクラス中は完全に呆れていた。

昼休み、ハヤテとナギは庭の方で昼食を食べていた。そんな中、女生徒の声が聞こえた。

「それ本当？」

「本当みたい、何かそれでカップル成立した人がいるみたいだよ！」

「へえーじゃあ私も3年の畑先輩に告白しようかな。」

「だったら私は野球部の空知先輩に・・・」

「ふーん・・・私はもちろん尾田先輩に告白する！」

てな声が聞こえたのだ。

「何だあの話？」

「ああ、実は今生徒たちの噂で文化祭の日の夕暮の時、屋上で告白するとそのカップルは将来結ばれるというものです、しかし……。」

「しかし？」

ハヤテは間をおいて喋り続けた。

「結ばれるカップルは1組だけです。」

「結構ケチだな、そのおまじない。」

ナギはこう言ったが脳内ではハヤテといつか……と思っていた。だがそんな事を考えるのはナギだけではなかった。他の女子もそうだし、ナギと同じようにハヤテが好きなヒナギク、アテネ、なぜかは知らないがどこから出その話を聞いた西沢、……。男の虎鉄なドライバルがいるのだ。ナギは決心した。この時にハヤテに告白しよう。

第4話：白皇文化祭（後書き）

新八「話に出てきた男子生徒の名前って」

作者「次をお楽しみにイイイイイイ！」

新八「オイコラ、無視するなよ。」

第5話：白皇文化祭2（前書き）

作者「やばい、書くネタがない。」

新八「それを言つなよ！これ一応前書き何だから！！」

第5話：白皇文化祭2

なんやかんだで文化祭の日になった。近所の人やら有名な人やら何か色々が集まっていた。その中には銀時やルフィ達もいた。

「いやースゲー賑わってるなー。」

「んな事より早くで店に行こうぜ！」

「おう！」

銀時とルフィは出店の方へ駆けて行つた。

「い・・・いいのかな？」

「いいんじゃないアルか？」

新八と神楽がこんな会話をしていた。その時後ろから声がした。

「ヒーハー！あなた達も来てたのねー！」

「あ、イワさん。それに土方さん達も。」

後ろにはイワンコフとハンコック、そして真選組の人達が来ていた。

「サンジちゃん！お久しぶりねーん！」

「会いたかったわアアア！」

「ウギヤアアアア！来るなアアアア！」

「あらあ、恥ずがしがって。」

「恥ずかしくねエエエエ！ってか来るなアアアア！」

カマバツカ王国のカマ達はサンジを追っかけ白皇学院に入ってしまった。

「それよりルフィはどこ行つたのだ？」

ハンコックが近くにいた新八に聞いてきた。

「ああ、ルフィさんなら銀さんと一緒に出店の方へ行きましたよ。」

「わかった、ルフィ・・・今行くからな。」

ハンコックもそう言つて中に入つて行つた。

「・・・それよりも土方さんはどうしてここへ？」

「実はあの方が一度でもいいから文化祭へ行ってみてーっつーからよー。」

「へ・・・へー。」

この時点で新八は嫌な予感がした。あの方って・・・まさか！

ハヤテ達は教室でメイド喫茶を開いていた。

「お・・・おかえりなさいませご主人様ー。」

ハヤテはメイド服姿でこう言った。何でこうなったかという今朝、いきなり生徒会3人娘に捕まり、強制的にこんな姿にされたのだ。

「ぎ・・・銀さん達が来たら・・・何か恥ずかしい・・・」

「確かに恥ずかしいな、その服装。」

ハヤテがそう呟いたがその隣に銀時がいた。

「オワアアア！銀さん・・・いつの間にー！ー！」

「おい、ツツコミしている場合じゃねーぞ。俺は客だ、さっさと案内しろよ。」

「は・・・はい。」

ハヤテは銀時を開いてる席に案内した。

「そう言えば新八さんとかルフィさん達も来てるんですか？」

「ああ。ルフィの奴はハンコックと一緒にだが・・・。」

銀時の脳裏にはあの事が浮かんでいた。

「オイ、ハンコック！大丈夫か！」

「わ・・・わらわは大丈夫じゃ。」

「本当に大丈夫か？俺がチョッパーのどこまで連れてくよ。」

ルフィはそう言うのと倒れているハンコックをお姫様だっこした。それによりハンコックは嬉しさのあまり気絶した。

「と言う事なんだ。」

「へ・・・へー。」

とりあえずハヤテは銀時を案内したのだが……。

「ハヤテー！この格好似合う」

突然抱きつこうとしたバカ（虎鉄）を蹴り飛ばしたのであった。

とりあえず席についた銀時は手元のメニューを開き中を見た。そこ

にはこう書かれていた。

- ・カレーライス
 - ・カレースープ
 - ・インド風カレー
 - ・カレー定食
 - ・カレーグラタン
 - ・カレーうどん
 - ・カレー風サラダ
 - ・おふくろの味風カレー
 - ・ハ○スバー○ンドカレー
- 鰯の煮物

「カレーしかねエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

「どうですか？僕達クラスのメイド喫茶」

「何がメイド喫茶だ！カレー喫茶じゃねーか！あとカレーに混じって鰈あるしよー！」

「一応ウケ狙いと言つ事で」

「いらねーよそんなの！」

とりあえず銀時はカレースープとデザートを頼んだのであった。

「ここか？メイド喫茶というのは。」

この声を聞いて銀時の持つスプーンの動きが止まった。

「どうかしたのか？」

丁度近くにいたナギが聞いた。銀時は声がした方を覗いてみた。声の主は何かを被っていて顔は見えなかったが銀時は確信していた。

第5話：白皇文化祭2（後書き）

作者「感想お待ちしています！」

新八「ネタがないからそれしか言っ事がないだけだろ？」

作者「黙れ眼鏡！！」

第6話：白皇文化祭3（前書き）

新八「いやゝ意外と人気ありますね、この話。」

作者「ああ、先に出した血桜忍より」

ヒナギク「そんなこと言ってる暇があったらさっさとあの話を書きなさいよ。」

作者「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヒナギク「あとそろそろ自虐ネタはやめなさい。混沌学院でも混沌物語でもやってるんだから。」

作者「それは・・・・・・・・どうだろう・・・・。」

第6話：白皇文化祭3

銀時が將軍と遭遇してしまっている頃、新八達はステージの前にいた。

「今から何始まるんだ？」

「しらねーよ。」

「楽しみだなあ。」

チョッパや神樂が目を煌かせてステージを見ていた。新八も近くの学生に「今からスペシャルゲストによるライブが始まる」と言われたのでここにいる。

「お通ちゃんのライブかな？」

「なわけねーだら。あの別の意味での超有名アイドルがこんな所に来るか？」

フランキーがポップコーンを食べながらこう喋った。

「確かにな。」

ゾロも同意した。ちなみにサンジはナンパの為ここにはいない。よって銀時達以外ここにいるのだ。しばらくしてブザーが鳴った。

「皆さん、しばらくお待ちせしました。今からスペシャルゲストによるライブを始めます。」

司会の生徒がこう喋った。ここで新八はよく目を凝らしてステージの方を見た。奥の方にどこかで見た事のある女の子がこちらの方をこっさり見ている。その後、ジャーン！とベースの音が響いた。

「こんにちわー、スペシャルゲストと呼ばれた・・・」

しばらく間をおいた後ステージのカーテンが上がって行き姿があらわになった。その姿を見て全員絶句した。何故なら前にいるのは・・・。

「・・・・放課後ティータイムです！」「」「」

一方將軍と遭遇した銀時は完全に困り果てていた。

「銀さん・・・あれって・・・」

「ああ・・・將軍だよ。」

ハヤテとナギも將軍の話は聞いている。何かある度この人が不幸になる事を。そんな彼らの心中を知らずに將軍は前のテーブルに座った。

「すまぬが、鰯定食を頼む。」

「かしこまりました、ご主人さま。」

そう言って一人の生徒が厨房の方へ向かった。

「大丈夫か？本当に・・・。」

「さあ？」

そんな中、將軍が拳手をした。

「何ですか？ご主人さま。」

丁度近くにいたヒナギクが將軍の接客をした。

「この『ごほうびジャンケン』とは何だ？」

ヒナギクは困った。これについて何も聞かされていなかったのだ。

「美希、これ何？」

ヒナギクは近くにいた美希に聞いた。

「お、ついにこのジャンケンをする者が現れたか！」

美希はヒナギクと將軍を教室の中央に呼び寄せた。

「さあさあ、皆さん！今からこのメイドと凛々しいちゃんまげのお客様の屋九軒が始まるよオオオオ！」

（（なッ何イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！））

銀時とヒナギクの心の中の叫びが見事シンクロした。ヒナギクはこうなる事を予想してなかった、銀時の方は必ず將軍が負けて・・・下手すれば將軍の足輕を公開してしまうのだ！

「ちよつと美希！何言ってるの！」

「スマンヒナギク、この事言うの忘れてた（笑）。」

「（笑）じゃないわよオオオオオオ！」

「すまないがメイドをチェンジしてくれないか？私は貧乳はあまり

好きじゃないんだ。」

将軍がヒナギクの目の前でとんでもない事を言い放ってしまった。その後、ヒナギクは闘志をむき出しにして将軍の前に立った。

「さあ、始めましょう。一気に片を付けてやるわ。」

（何やってんだあの将軍はアアアアアアアアアアアアアアアア！）
銀時は確信した。将軍が負けると。

「イエーイ！私だ」

「律、やかましい！」

「イタイ！」

新八達の方は完全にライブに見入っていた。

「ねえー、あずにゃん、私達の他にもゲストがいるって本当？」

「わ．．．私に聞かないでくださいよ！それに他のゲストって．．．始めて聞きました。」

「誰が来るのかー？」

「私も初耳よ。」

そんな中、突然と辺りが暗くなった。

「フエエエ！律ウウウ！」

「オイコラ！抱きつくな！動けないだろうが！」

少しの間をおいた後、どこからか声が聞こえた。この声を聞いて誰もが目を大きく開けた。しばらくして声の主が姿を現した。

「どうも、初音ミクです」

声の主は初音ミクだった。隣にはリンとレンもいる。彼女が出てきた事で辺りのみくみく菌に感染した人達のテンションはマックスになった。

「は．．．白皇すげえ．．．」

「ああ．．．」

新八とゾロはまさかの展開にただ目を開いて驚くばかりであった。

そんな中、ナギはどうしようと思っていた。

（実は今生徒たちの噂で文化祭の日の夕暮の時、屋上で告白するとそのカップルは将来結ばれるというものです）

そう、おまじないの条件となる夕暮まで同ハヤテを誘おうか悩んでいたのだ。ヒナギクも將軍を全裸にさせた後その事について考えていたのだ。そんな中、ついさつき白皇についた西沢やアテネも同じような事を考えていた。そして、文化祭の終了の時刻・・・そして少女たちの戦いの時が近づいてきた。

第6話・白皇文化祭3（後書き）

作者「あともう少しで文化祭の話が終わります。」

マリア「まさかの展開になるので楽しみに。」

第7話：白皇文化祭4（前書き）

作者「乙女の戦い、ついにはじまる！」

マリア「皆さんがどうなるか楽しみにしててくださいね。」

第7話：白皇文化祭4

『では本日来て下さった放課後ティータイムの皆様、及び初音ミク様、鏡音リン様、鏡音レン様、ありがとうございます。では白皇文化祭を閉会したいと思います。』

てな訳で白皇文化祭は終わった。唯達やミク達が会話しながら迎えるバスに乗り始め、涙目の將軍は迎えの車に乗り込んだ。だが少女たちの戦いはこれからだったのだ。

「オイハヤテ！私を連れて屋上へ行け！」

ナギはハヤテに向かってこう叫んだ。

「え？何ですか？」

「いいから早く！さつさと」

「ハヤテ君！」

ここで歩が割り込んできた。その後、ヒナギクもアテネもハヤテの方へ寄って行った。

「うあああああ！ハヤテは私と行くんだアアアアアアア！」

ナギはハヤテに飛び付いた。ハヤテは一瞬バランスを崩したがすぐに体制を直した。

「ハヤテ、すぐに屋上へ行け！今すぐに！誰よりも早く！」

「え・・・ええ。」

ハヤテは最短の距離で屋上へ向かった。

「くう・・・先を越された・・・」

「諦めないよ！」

「ハヤテは私と・・・」

ヒナギク、西沢、アテネもハヤテ達の跡を追い、他の女子+虎鉄も後を追った。

一方前回で完全に空気だった真選組の人達は帰りの支度をしてい

た。・・・が！

「何イ！願いかなうおまじないだア！」

「ええ、そんなのがこの学校にあるみたいですよ。」

山崎がこう言った。その時、土方の脳内である考えが浮かんだのであった・・・

「あははゝマゝヨリゝン。」

「こつちだよゝ土方くゝん。」

「わあゝここかあゝマヨネーズ王国の入り口はあゝ。」

土方のの目の前にはマヨネーズ王国と書かれた看板があつた。ドアを開き中に入ってみるとそこには夢の光景（土方にとっては）が土方の視界に映っていた。

「願いがかなうか・・・」

土方が完全に妄想モードに入っている中、沖田、近藤などそこにいる面々はすぐに学校の方へ走って行った。

「あのゝ、かなうのは恋愛だけ・・・なのに・・・」

肝心な所を言い忘れて、山崎はもうどうでもいいやと思い車に乗り込もうとしたが誰かに腕を掴まれた。

「へ？」

「その話、本当かしら？」

そう言うのは俺が書いている小説の中でも滅多に出演しない猿飛あやめだった。

「え・・・ええ。そうですけど。」

「そう・・・。」

さっちゃんはずぐに学校へ走って行った。

「変な事起こらなければいいけど・・・。」

「そうですね。」

「ああ。」

「まったく、その通りアル。」

この場にいた新八、神楽、ルフィ海賊団が反応した。

その一方、屋上への階段はなぜかサンジがトップで走っていた。

「ウツヒヨヒヨーイ！うまく行けば俺もT.O.L.O.V.Eるのリトやネギまのネギやおまもりひまりの優人みたいにモテモテなりア充に・・・ヒヤッホオオオオオオオオオオイ！」

バカ（サンジ）はラブハリケーンを起こしながら上へ向かって行ったが・・・。

「ん？下から声が聞こえ……。」

下の階から女子の軍団が押し寄せて来た。

「うおおおおお！ 皆俺の願いがかん」

バカ（サンジ）は喜んだが女子の軍団はサンジを押しつけ上行ってしまった。

「お・俺の・ゆ・め・が」

サンジ、脱落。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！マアアアアアヨオオオオリイイイイイン！」

土方は雄叫びをあげながら階段を走っていた。誰も彼に追いつけない。

「あと少し！あと少しで俺もマヨネー」

「くたばれ土方アアアアアア！」

下からバズーカの発射音と共に沖田の声が聞こえた。

「オワアアアア！何してんだあのバカアアア！」

沖田のせいで土方の目の前の階段が崩壊した。

「チッ！あいつのせいで階段が……他の道を行くしか」

「お先！」

土方の上で声が聞こえた。それはナギをお姫様だっこしたハヤテの姿だった。ハヤテは見事先にある階段に着地した。そして走って去って行った。

「ヤロー、俺も負けられねエ！」

土方もジャンプをし階段へ向かったが・・・

「どきなさい！」

「邪魔です！」

「失礼！」

「くたばれ土方！」

ヒナ、西沢、アテネ＋沖田にブツ飛ばされ下の階段へ落ちて行つた。下の階段に落ちた土方は背中を押さえながら立ちあがった。

「チクシヨ・・・覚えてやがれ、次こそは」

と言っていたが上から襲撃してきた沖田の攻撃によって土方は倒れた。

土方、脱落。（ついでに沖田も夢がかなったので勝手に離脱。）

今の状況、トップを走っているのがハヤテ＆ナギ、それを追うようにヒナギク、アテネ、西沢、虎鉄の順に走っている。屋上まであと少し、だが彼らは前に謎の影が存在する事をまだ知らなかった。

第7話：白皇文化祭4（後書き）

作者「次回、文化祭編完結!!」

マリア「ナギはついに告白するでしょうか？」

新八「でもまだ終わらせる気ないんだろ？作者。」

作者「・・・あ、そろそろマイソロ3をやらないと」

新八「話を終わらすなアアアアアアア!!!!」

第8話：白皇文化祭5（前書き）

作者「白皇文化祭編、今回で終わりです!!」

マリア「乙女たちの戦いはどうなるか楽しみですね。」

第8話：白皇文化祭5

中で激闘が行われているさなか、新八達は土方達の帰りを待っていた。

「大丈夫かな・・・あの人達。」

「大丈夫じゃないだろ、誰か必ず怪我するよ。」

チョッパは救急箱を出し、すぐに治療できるような状態にした。少ししてボロボロの近藤が現れた。

「ぐ・・・最近の女子って・・・団結すると強いな・・・。」

「近藤さん・・・。」

「おい、すぐ来てくれ。治療するから。」

その後も怪我をした生徒や沖田が気絶したサンジと土方を引きずりながらやって来るなど、怪我人が続々とチョッパの元へ集まった。

「そう言えば銀さんはどこ行っただろう。」

新八は銀時の姿が見えない事に気付いた。

「今に来るだろ。」

「そうアル、もし何かあっても銀ちゃんなら無事ネ。」

出店の焼きそばを食べながらルフィと神楽がこう答えた。

一方ハヤテ達の方は未だにデットヒートを繰り広げていた。

「いいぞハヤテ！あと少しで屋上だ！」

「ええ！」

ハヤテはまた一段階段を上がるうとしたがなぜか又メツとした。

「どうした？」

「何か床にばらまかれています！」

二人が床下を見たら、床に納豆が巻かっていた。

「オイハヤテ・・・これって・・・。」

「ええ・・・。」

「先へは行かせないわ!」

上から声がした。上には縄やロープでぐるぐる巻きにまかれた銀時を抱えたさっちゃんが立っていた。

「さっちゃんさん・・・やっぱりあなたですか。」

「そうよ!あのおまじないを見事成し遂げて銀さんと一夜を過ごすんだから!」

「オイイイイイ!ハヤテエエエエエ!助けてくれエエエエエ!」

銀時が泣き叫んだ。

「仕方ありません・・・戦いたくはありませんが・・・」

「私と戦う気?・・・だったら見せてあげる!元お庭番の力」

さっちゃんが叫びながら床に降りたが納豆に足を取られ、滑った。で、その衝撃で下の階段を転がるように落ちて行き、下にいるヒナギク達をぶつ飛ばした。

「オワアアアアア!落ちるうウウウウ!」

銀時はさっちゃんが滑った衝撃で上に上がっていた。・・・そして悲劇は起きたのであった。銀時は何とか着地しようと試行錯誤色々やった、だが着地場所は手すりだった。しかも見事に手すりが男の急所に命中してしまった。

「イギヤアアアアアアアアアアアアア!」

あまりの痛さに銀時は悲鳴を上げたが悲劇はこれで終わらなかった。銀時の体はそのままの状態の手すりを滑り始めたのだ!

「アアアアアアアアアア!俺の(ピーー!」がアアアアアアアアアア!俺の(ピーー!」がアアアアアアア!」

銀時の叫びが段々と薄れて行った。結局生き残ったのはハヤテとナギだけになった。

「・・・行くか・・・屋上に。」

「はい。」

そう言った後、二人は屋上へ向かった。

屋上からの夕日はかなり綺麗だった。だがナギはおまじないの事を思い出しながらこう言った。

「ハヤテ、実はお前に言いたい事がある。」

「何ですか？」

ハヤテがナギの方を向く。ナギは恥ずかしながら口を開こうとした。だがなかなか言えない。好きの2文字が言えない。

「どうしたんですか？」

ハヤテが心配をした、ナギの心臓の鼓動が段々と早くなってきた。いざ言おうとするとなかなか声に出せない。

「じ・・・実は・・・実は前からハ・・・ハヤテの事が・・・」

「僕の事が・・・」

「・・・・・・だ・・・・・・大すk」

ナギが勇気を出して言おうとしたがその同時にそれから轟音が轟いた。上を見たら宇宙船が白皇に向かつて落下してきているのだ。

「エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！な・・・何ですかこれはあ！」

「知るかアアアア！」

二人は何とか落下物から離れ、様子をうかがった。宇宙船は白皇を半壊させ、轟音を立てて着地した。

「これって・・・まさか・・・」

「宇宙人か・・・」

しばらくして宇宙船の扉が開き、中から誰かが現れた。その人物とは・・・。

「アッハッハッ！すんませ〜ん、万事屋金ちゃんってどこですかあ〜？アッハッハッ！」

中から現れた人物とは銀時の盟友、坂本辰馬であった。その後、ハヤテとナギは夕日を背景にそのバ力を飛び蹴りで蹴り飛ばした。

第8話：白皇文化祭5（後書き）

おまけコーナー　桂魂〜かつらだま〜

ヅラ「よいこのみんな〜桂魂が始まる」

作者「わけねーだろうがアアアアアアアア！」

ヅラ「うわらば！」

作者「まったく何でオメーがここにいるんだよ！ってかいつの間にわき出た！」

ヅラ「この話で俺の出番ないじゃないかアアアアアア！」

作者「いずれはだすよ！待っている！」

ヅラ「待てるかアアア！」

作者「待ってるよ！子供じゃあるめーし！」

ヅラ「子供ではない！桂だアアアアアアアア！あと俺の名前ヅラになってるけどヅラではない！桂d」

作者「次回お楽しみに！」

第9話：ハイキング（前書き）

作者「さて今回から新展開です。」

マリア「楽しみにしててくださいね♪」

第9話：ハイキング

ハイキング。それは皆で山やら野原やらどっか行つて歩いて一緒にランランルー・・・てなものである。実際白皇にもそんな企画があるのだが・・・。

「嫌だアアア！行きたくないイイイ！」

これを嫌がるのはもちろん我らの三千院家のお嬢様、ナギである。「何で春やつたハイキングをまたやるんだアアアアア！」

「大丈夫ですよ、今回は僕がお嬢様と一緒にあるきますから。」

ハヤテが営業スマイルでナギにこう言った。

「・・・ハヤテと一緒に・・・それも悪くないな。」

と言つてハイキングの参加を決定した。この光景を見ていたマリアはたびたびハヤテは色んな意味ですごいなと思つていた。

というわけでハイキング当日。ハヤテとナギはヒナギク達とグループを作り近くの山を登つていた。

「疲れた〜。」

「大丈夫ですか？」

「ああ・・・何とかな。」

ハヤテとナギはこう会話をしていた。ヒナギクと泉はその光景を見て少し羨ましいと思つた。そんな中。

「まああああつたけ狩りじゃあああああああああああ！」

聞いた事のある声が響いた。

「まさか。」

ハヤテ達は声のした方へ行つた見た。そこには松茸狩りに来た銀時とルフィ達がいた。

「銀さんたちでしたか。」

「おっ、ハヤテじゃねーか！オメーらも松茸狩りか？」

ルフィがこう聞いて来た。

「違いますよ。僕達はただ学校の企画でハイキングへ来ただけです。」

「そうか、そうか。ハイキングか。」

「オイルフィ、さっさと松茸狩りに行こうぜ。方向音痴のゾロが先に行きやがった。」

「そうだな、俺達も急ごう！じゃーなーハヤテ、また会おう！」

ルフィはそう言って銀時の跡を追って行った。

「・・・また騒ぎが起きそうだな。」

「ねえ、ハヤテ君。ナギが先に行っちゃったわよ。」

ヒナギクにこう言われハヤテは我に戻った。

「あああ！待つて下さいお嬢様ああアアアア！」

ハヤテはあわててナギの跡を追った。

ナギは一人先に歩いていた・・・が！設定上彼女はゾロと同じく方向音痴である、覚えているだろうか、その設定。

「ったく・・・何やってるのだからハヤテ達は・・・というより・・・ここ、本当に山だよな？」

ナギの目の前には何かモンハンみたいな風景が広がっていたのだ。呆然としていたら目の前から何か駆けてくる音が聞こえた。その音はモンハン2ndで俺を苦しめた雑魚モンスターの・・・イノシシであった（ヤベー、名前忘れたよ）。

「うわああああああああ！」

ナギはそのモンスターから逃げた、だが崖に追い込まれてしまった。

「は・・・は・・・」

目の前のモンスターは次の攻撃で仕留めようと意気揚々としていた。

「ハヤテエエエエエエエエエエエ！」

ナギがハヤテの名を叫んだ。その瞬間、ナギの頭上で何者かが現

れ、モンスターの脳天に急降下キックをお見舞いした。

「大丈夫ですか？お嬢様？」

「は……ハヤテエエエ！」

ナギは泣きながら彼に抱きついた。彼と言つのはやっぱりハヤテである。

「うええええん！怖かったよ！」

「ははは．．．でも僕が来たから大丈夫です」

バキィ！

「ふえ？」

会話していると二人の足元から何かが折れる音がした。その瞬間、
かけが崩れた。

「うわあああああああああああああ！」

ハヤテは落下している時、何とかナギを守ろうとしすっかりと彼女を抱きしめた。

一方銀時達は。

「銀ちゃん！また特産キノコゲットアル！」

「ぎゃああああ！助けてエエエエエ！何でリオレウスがいるの
オオオオ！」

「知るか、オメーは黙ってレウスを倒せ。」

「無理無理無理無理！こんなの無理だつて！」

「ってかルフィはどうした？あいつも戦ってるんじゃない。」

「上手に焼けましたー！」

ルフィはこんがり肉を上^{うへ}に上げてこう言った。

「何やってんだオメーはアアアアアアア！」

銀時がこう叫んでいたらリオレウスの火炎玉を食らった。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「ウフアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ハヤテとナギはまだ落下していた・・・が。

ドッシイイイン！

ボキイ！

と音がした。

「イタタタタ・・・」

「大丈夫ですかお嬢様。」

「ああ・・・」

ナギはハヤテに守られたため怪我もなく無事だったが・・・。

「ハヤテは大丈夫か？」

「僕は大丈夫で・・・」

ハヤテは足を見た。そして絶句した、何故なら右足がとんでもない方向を向いていたからだ。

「これって・・・」

「ああ・・・」

少し間を開けてハヤテとナギはこう叫んだ。

「「最悪だアアアアアアアアアアアアアア！」」

という訳でハヤテとナギの遭難生活の始まり始まり。

第9話：ハイキング（後書き）

おまけコーナー

作者「どうでした今回の話？」

ヅラ「あのイノシシの名前本当に忘れたのか？」

作者「はい。なんだっけ？ドスファンゴだっけ？」

ヅラ「俺に聞くな！俺はマリオしかやってない！」

新八「そういえば桂さんって何かゲーム機を持ってますか？」

ヅラ「フッフッフ・・・聞いて驚け！俺は最新機種であるスーパーファミコンをこの前格安で購入したのだ！」

作者・新八「古いよ！！」

第10話：ハイキング2（前書き）

作者「いやゝヤバい事になったなゝ。」

マリア「どうかしたんですか？」

作者「11話以降全然話書いてねー。」

マリア「……………え？」

第10話：ハイキング2

「ハヤテくん、ナギー、どこなのー！」

「返事してー！」

ハヤテとナギが行方不明になりヒナギク達は彼らを探し始めた。

「ったく……一体どこにいるのよ……」

「ハヤ太君、確かナギちゃんを探しに出かけたね。」

「そうね……とにかく早く山頂に行ってお姉ちゃんに連絡しないと。」

ヒナギクは生徒会3人娘と共に山頂へ向かった。しばらくして近くの茂みがガサガサ揺れていた。

「まさかハヤテ君！」

ヒナギクは茂みを調べたが中にいたのは……

「………何だい………譲ちゃん？」

そこにいたのはダンボールを装備しているマダオだった。

一方ハヤテとナギは何とか近くにあつた洞窟で休んでいた。

「大丈夫かハヤテ？」

「え……ええ、何とか。」

ハヤテの右足は骨折していた。そのため、動こうとすると足が目茶苦茶痛い。

「………どうしましょう？」

「………分かりません。」

二人は深いため息をついた。

「誰か……助けてくれますかね？」

「……ヒナギク達がいるさ、それに銀さん達も……。」

その頃、頼りにされているヒナギクはというと。

「まったく・・・どこへ行つたのハヤテ君達は・・・」

ここでヒナギクは色々と考えた、で、一つの答えを見つけ出した。その内容とは・・・。

モワンモワンモワーン（あ、これよくアニメとかであつた妄想シーンに入る時の効果音ね。）

「アアアアン！止めてくださいお嬢様あ！」

「はっはっは、遊んでやるぞハヤテ♪」
ビリッビリッ！

「アアアア！そこは止めてくださいアアアい！」

「ほう、意外と大きいなハヤテの」

「オメー何考えてんだよ。」

ヒナギクは我に戻った。で、近くにはかごを背負つた銀時達が立っていた。

「銀さん！いつの間に！」

「オメーの妄想中からだよ。」

「しっかし何考えてんだ？オメーもハヤテの（ピーー！）が気になるのか？」

「違うわよ・・・って何で私が考えている事を」

「俺らみてーなギャグ成分が入ってる漫画キャラは他人の妄想を覗けるという画期的アビリティを常に発動しているんだ」

「いやアアアアアアアアアアアアア！」

ヒナギクは銀時の脇腹に拳を沈め去つて行つた。で、走つたのはいいんだけど走つた先が・・・崖っぷちだった。その光景を見たヒナギクは気絶した。

どうにもこうにもできないハヤテとナギはひたすら助けが来るのを待っていた。

「うう・・・」

ナギの小さな体は寒さで震えていた。

「大丈夫ですか？」

「ああ・・・ちよつと寒いだけだ。」

少しの間をおいてハヤテはナギを抱きしめた。

「フェツ！」

「どうですお嬢様？温かいですか？」

「う・・・うん・・・。」

ハヤテの腕の中でナギはこう答えた。だが助けは何時間たっても何時間たっても来なかった。

「・・・なかなか・・・きませんね。」

「そうだな・・・。」

出口の方を見るともう暗くなっていた。

「・・・」

「・・・」

グウ

どこからか腹の音が鳴った。

「・・・お嬢様？」

「・・・何だ？」

「僕のバッグの中にお菓子がありますけど・・・。」

「・・・そうか・・・。」

ナギはそう言ってハヤテに抱きながら眠り始めた。

「・・・大丈夫かな・・・僕達。」

ナギを抱きかかえながらハヤテはこう呟いた。

第10話：ハイキング2（後書き）

おまけコーナー

マリア「ちよつと、小説書いてないって本当ですか！」

作者「ちよつと時間がなくてね。」

新八「何やってるんですか？」

作者「マイソロ3」

新八・マリア「小説を書けエエエエエエエエエエ！」

第11話：ハイキング3（前書き）

今回は前書きのやりとりはありません。楽しみにしている方、すみません。

第11話：ハイキング3

ハヤテとナギが行方不明になって数時間が経過した。今ここに三千院家SPの皆さんと白皇の先生方、そしてなぜか銀時やルフィ達もいた。

「まったく、何で俺らが・・・。」

「仕方ないじゃないの、だって一大事だもん。」
雪路が銀時の肩を叩いた。

「でも一体どうやって探すんです？」

新八がこう聞いた。その時、ウソップとフランキーが何かを持ってきた。

「これを使う時が来たようだな。」

「何ですかこれ？」

「これは俺とウソップが作ったネズミ捕り機だ。」

「それにしても大きいですね。」

そのネズミ捕り機は新八の身長を少し超えるほどの長さだった。

「でも今回はハヤテさんとナギちゃんの搜索なので役に立つか」

「大丈夫だ！」

「この中にトラップの食べ物を置いておけば大丈夫だろう！」

本当に大丈夫か？新八はそう思った、何故なら嫌な予感しかしないからだ。

「かかった！」

誰もがトラップの所へ向かった。だがトラップの中にいたのは・・・。

「何やってんの・・・オメー。」

マダオだった。

「おじさんだってプライドを捨てる時があるんだよ。」

一方ハヤテは腕の中で眠っているナギを優しく抱きながら助けを待っていた。

「・・・まだかなあ・・・。」

「・・・う・・・うん・・・。」

ハヤテの腕の中でナギがモゾモゾ動いた。

「・・・僕が・・・何とかしなきゃ・・・でも・・・この足じゃあ・・・。」

ハヤテは折れた脚を見た。そして自分の不甲斐なさを恨んだ。

「はあ・・・。」

ハヤテは深いため息をついた。

「・・・ハヤテ・・・どうかしたのか？」

腕の中でナギの声が聞こえた。

「・・・僕って・・・駄目ですね。」

「え？」

「いざという時お嬢様を守れなくて・・・こんな怪我がなければ僕もお嬢様も・・・。」

「バカ。」

ナギのこの一声でハヤテの表情は硬くなった。

「大丈夫だ、助けは来る。そんなネガティブな事ばっか考えてるな。」

「

でも」

「大丈夫と言ってるだろうが。私が信じられないのか？」

ナギはハヤテを見つめた。ハヤテはナギを再び抱き優しく胸元へ寄せた。

「すみません・・・こんなこと言って・・・。」

「ハヤテ・・・。」

二人はしばらく抱き合っていた。そんな中、何かの雄叫びが聞こえた。

「な・・・何ですか今の！」

「わ・・・分かん！」

外を見たらそこにはティガレックスが息を上げてこちらを睨んでいた。

「エエエエエエエエエエ！何でもモンスターがここに
いるんですかアアアアア！」

「は……ハヤテエエエエエ！」

何とか逃げたいが骨折しているため動けない。ハヤテは色々悩んだ末一つの答えが浮かんだ。

「お嬢様……ここから逃げてください。」

「でもハヤテが」

「いいから早く！」

ハヤテが叫んだ直後、ティガレックスが雄叫びをあげこちらに向かって突進してきた。

「うわアアア！」

「お嬢様！ 僕の所へ！」

ハヤテはナギを抱きかかえティガレックスから背を向け、目をつぶった。

ハヤテ達が目をつぶり少し時間が立った。目を開けるとそこにはティガレックスの頭をなでているルフィの姿があった。

「よしよし、悪いな。お前の住処を勝手に入ったりして。」

「る……ルフィンさん。」

「よっハヤテ、ナギ。お前からここにいたのか。皆探したぜ。」

ルフィはハヤテの足を見て驚いた。

「ハヤテ、お前骨折れてんじゃねーか！ 待ってるよ、チヨッパを呼ぶからな！ よし、頼むぞ！」

ルフィはティガレックスの背中に乗り外に出ようとした。

「ちよつと待て！それだつたら私とハヤテがティガレツクスの背中に乗って皆の所に行った方が早くないか！」

ナギにこう言われルフィは手を叩きこつ叫んだ。

その様子を見ていたハヤテとナギは少し呆れたがルフィが助けてくれたため皆の所へ戻る事が出来た。

数日後、病院にて。ハヤテは骨折の為入院していた。

「ハヤテ、ゴメン。私のせいで骨折なんて・・・。」

「いいですよ、お嬢様が無事なら僕はそれでいいんです。」

「うむ・・・」

ハヤテは笑顔で泣くむナギを見ていた。ナギもハヤテの笑顔を見て笑顔の顔に戻った。

「いいのかあの二人？」

「いいんじゃないの？」

「ってかこの作者の作品ってこんなオチが多いよな。」

「仕方ないアル、銀皿もまだ甘い所があるからな。」

その様子を遠くから離れて見ていた銀時とルフィ達はこう話していた。

第11話：ハイキング3（後書き）

作者「はぁ・・・」

マリア「どうしたんですか？いつものように元気が・・・」

作者「たりめーだろ・・・あんな多規模な地震が発生して被害も酷くて・・・そして犠牲者も・・・テレビを見るたびせつなくなってくる。」

新八「ええ・・・皆さんは大丈夫ですかね？」

作者「わからねー・・・俺たちができることはこれ以上被害が起きないように・・・犠牲者が増えないように・・・皆が無事でいられるように祈ることと募金活動をやっつかねーとな・・・。」

マリア「そうですね。何もしないより何かをやった方がいいですね。」

作者「ああ。」

第12話：二人っきりの日（前書き）

作者「はい今回から新しい展開です。」

新八「楽しみにしてください。」

第12話：二人っきりの日

ある日、いつものようにナギは爆睡していた。

「お嬢様、起きてください。」

「んゝ、まだ眠いゝ。」

「早く起きてください。今日はマリアさんがいないのですから。」

「そうなのかゝ。」

しばらくナギは考えた後飛び起きた。

「フェツ！マリアがいない！」

「そうです。今日はお登勢さんの所へ行くって言っていましたよ。」

「・・・タマやシラヌイは？」

「今日は一日定期健診ですよ。」

ナギはしばらく考えた。もしかしたら一日・・・ハヤテと二人っきり！

「どうしたんですかお嬢様？」

「ふえっ！何でもない何でもない！」

「起きたのなら朝食を食べてくださいね。」

ハヤテはこう言った後ナギの部屋を出て行った。

『本日は一日雨です。もし出かけるなら傘のご用意を！』

朝のテレビニュースの女子アナが笑顔でこう言った。確かに今日は朝から雨が降っている。

「今日は一日雨だそうですね。」

「別にどうでもいい。どうせどこも出かけないからな。」

ナギがサンドウィッチを口にしながらこう言った。

「ははは・・・確かにこの雨じゃ引きこもりのお嬢様も出かける気はありませんね。」

「一言多いぞ。」

ナギは頬を膨らませ怒った。一応昼食を終わらせハヤテは台所へ行き皿を洗い始めた。その一方ナギは前に録画していたアニメを見ていた。

『頭・・・冷そつか。』

ドツコオオオオオオオン！

『ティアナアアアアアアアアアア！』

「うーむ、やはりこの場面は何回見ても何か切ないな。」

「お嬢様、お皿洗い終わりました。」

ハヤテが布巾で手を洗いながらナギの元へやって来た。

「うむ、御苦労。」

「またなのはストライカーズの8話見てるんですか？」

「ああ。この場面は何度見ても飽きないからな。」

「確かにこの場面は有名ですからね。」

ハヤテもナギの横へ座り魔王降臨の場面を見ていた。

その一方お登勢の所にいるマリアは。

「いいかい？この煮物はしっかりと煮づけしないと味が出ないからね。」

「へえ、そうですか。」

「こうすれば同じような煮物でも味が一段とおいしくなるんだ。」

「始めて知りました。」

厨房でマリアはお登勢に料理を習っていた。

「さっすが何千年も生きてるバンパイアだな。料理に関する知識も多くあるな。」

カウンターでルフィと共に宴をしている銀時がこう茶化した。

「うるせー天パ！後でオメーも煮込んでやろうか！」

「お登勢さん、あの人は無視してましよう。」

マリアは怒っているお登勢にこう言った。

一方ナギの方はソファーに寝そべって漫画を読んでいた。

「うむ、やはりいつ見ても北斗の拳は面白いな。」

ナギはただひたすら漫画を見ていた。ハヤテの方は洗濯物を畳んでいた。

「ふう・・・やっぱり慣れないな・・・女性の下着を畳むって。」

ハヤテは少し赤くなりながら下着類を畳んでいた。少しして洗濯物の整理を終えたハヤテはナギがいる居間へ向かった。ナギの姿を見てハヤテは呆れた。

「お嬢様、座ってみましょうよ。はしたないですよ。」

「ふえっ！」

ハヤテはナギをお姫様だっこしソファーにしっかりと座らせた。

「何をするんだいきなり！」

「しっかりと座ってくださいよ。スカートの中が見えちゃいますよ。」

ハヤテがこう言った後ナギは少し考えた。

「ハヤテ・・・まさかスカートの中を見たな！」

「み・・・見てませんよ！」

「本当か！」

「本当です！」

ナギはふくれっ面をした後しっかりとソファーに座って北斗の拳を読み始めた。

「ふう・・・僕もそろそろひと段落しよ。」

そう言ってテレビの電源をつけた。番組は緊急報道になっていた。

「あれ？どうしたんだろ？」

「どうしたハヤテ。」

「ええ、何か緊急特番みたいですよ。」

二人はテレビ番組を見始めた。

『皆さん！気をつけてください！本日はとんでもない雨の量です！台風並み、いや台風以上の雨の量です！一部地域では雨により崖崩れが多発、そして川の水の氾濫が多発しています！今日は絶対に外出はしないでください！大切なことなのでもう一度言います、絶対に』

に絶対に絶対に外出をしないでください！」

アナウンサーがこう言った後二人は窓を覗いた。外はとんでもない量の雨が降っていた。少ししてハヤテの携帯にマリアから電話が来た。

『もしもし、ハヤテ君？』

「どうしたんですかマリアさん？」

『実はこの雨でかぶき町の方で緊急外出禁止令が出されたんです。雨が止み次第そちらに戻るけど・・・最悪の場合ナギの事をヨロシクね。』

「はい。わかりました。銀さんやルフィさんによろしく。後帰る時は気をつけてくださいね。」

『ええ。わかった』

『オイマリアー！この煮物うめーぞ！』

『さつすが三十七歳！料理の貫録があるな！』

電話の方から酒を飲んで酔った銀時とルフィがマリアを茶化す声が聞こえた。その直後電話は切れた。

「大丈夫かな？二人とも。」

「さあ？」

ハヤテとナギはこう会話した。

第12話：二人っきりの日（後書き）

おまけコーナー

桂「作者アアアアア！俺は一体いつになったら」

作者「いずれ出すからいいよ！」

桂「本当だな！」

作者「本当だよ！出すよ！」

桂「じゃあ楽しみにしているぞ！」

第13話：二人っきりの日2（前書き）

作者「二人っきりの館で何かが起こる！執事とお嬢様の恋物語、二人っきり編2話、開始！」

マリア「なんですその始まり方。」

作者「なんとなくコナンっぽくしてみようかと・・・」

新八「オメーサンデーだとハヤテしか読まないくせに。」

作者「別にいいだろうが、アニメ見てるんだし。」

第13話：二人っきりの日2

二人はしばらく別々の事をしていた。ナギは読んでいた北斗の拳の続きを読み始めハヤテはテレビで大雨の情報を見ていた。だがナギはここでハツとした。そう、今現在ハヤテとナギは二人っきりののだ。そう考えるとナギは少し赤くなった。

「そう言えばハヤテと二人っきりだな・・・。」

「どうかしましたお嬢様？」

テレビを見ていたハヤテがこう聞いて来た。ナギは何でもないと言って北斗の拳を読みなおしたが二人っきりと考えると少しドキドキする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人の間に静寂の空気が流れ始めた。

（イカーン！何か会話をしないと何か変な空気になる！）

ナギはこう思いハヤテにこう話しかけた。

「な・・・なあハヤテ。北斗の件に出てくるアミバはどう思う？」

「どう思っつて・・・出てきて少ししたらケンに倒されましたよね。うわらばって言っつて。」

「そ・・・そうだな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

会話終了。

（駄目だ駄目だ駄目だアアアアア！こんな調子じゃあ会話おろかコミュニケーションを図れないイイイイ！）

ナギは心の中でこう叫んだ。だが少ししてハヤテがこう話しかけて来た。

「お嬢様、お昼ごはんはどうしますか？」

「え？もうそんな時間か？」

ナギが時計を見て見ると時計の針は十一時五十分を示していた。

「うーん・・・そろそろ頼むよ。」

「分かりました。今から作り始めますのでしばらく待っていてください。」

ハヤテはそう言った後台所へ向かった。

一方マリアの方は。

「あのマリアさん・・・いいんですかあの二人？」

「そうだが・・・いくらあの二人でも風邪ひくつて。」

新八とチョッパーは心配しながら窓の方を見ていた。窓の外にはマリアにやられたパンツ一丁の銀時とルフィが地面に埋まっていた。

「少しはきつくお灸を吸えないと・・・。」

「いや、でもこれはやり過ぎじゃあ。」

「いいんです。」

「でもこれは。」

「いいんです。」

マリアは黒い笑顔で新八に向かってほほ笑んだ。その笑顔を見た新八は引いた。

ハヤテとナギはテーブルに向かい合わせて昼飯を食べていた。

「うむ、やはりハヤテが作るご飯はうまいな。」

「いいえ、それほど。」

二人は笑顔で話し合いながら昼食を食べていた。その一方でテレビ番組はいつものタ。の。ア。ワ。ー。ではなく大雨警報の緊急番組だった。

「しっかし今日の雨はすごいな。どこも緊急番組だ。」

「そうですね。かぶき町の方は大丈夫かな？」

「大丈夫だと思うぞ。あそこの町の人達は一致団結したら魔王だろうが拳王だろう何が来ても大丈夫だって神楽が言ってたぞ。」

「確かにあの町の人達が一致団結したら何が来ようと勝てますね。」

ハヤテとナギは昼食を食べながらこう会話をしていた。

「しかしどうします？予報だと夜までこの雨だそうですね。」

「大丈夫じゃないのか？どうせ一步も外へ出ないし。」

「はい。だけどマリアさんはどうなるんですかね・・・？」

「そうだな。もしかしたら銀さんの所で泊るのかな？」

「かもしれませんね。」

ハヤテはピラフを口に運びながらこう言った。

昼食後、二人はマリオカート64で遊んでいた。

「うわ！まさかあんな所にショートカットがあるなんて！」

「よし！これで互いに30勝だな！」

「お嬢様強いですね。」

「ハヤテも強いよ。レインボーロードのあの無理矢理なショートカットを3週連続で成功させるなんて思ってもなかったよ。」

とにかくマリカー64を遊んでいるうちに時は過ぎて行った。二人はゲームを止め夕方によくやっている刑事ドラマの再放送を見ていた。

「いや、相棒は何度見ても面白いな。」

「ええ。あのドラマは何か考えさせられます。」

二人はテレビのドラマに夢中だった。

で一方のマリアの方は。

「ねえ・・・銀さんたち危なくないですか？」

「ああ。あの二人唇が紫になって来てるぞ。」

外で埋まっている銀時とルフィの唇が紫になっていた。

「ええ、流石にあれはまずいわね。」

マリアはこう言った後外へ出て行った。

「もしかして・・・」

「今の事は水に流したのかな？」

新八とチヨッパはこう会話した後マリアが入って来た。

「あれ？銀さんとルフィさんは？」

新八がこう言った後マリアは窓に指をさしお登勢からタオルを借りて奥の部屋へ入って行った。で、外の地面からは銀時とルフィの足が生えていた。

「・・・根本的に解決してねエエエエエエエエエエ！」

新八はこうシャウトした。

第13話：二人っきりの日2（後書き）

おまけコーナー

新八「あああ！また負けたアアアアア！」

作者「だから言っただろうが、俺のアーロンにかなうわけがねーんだよ。」

新八「チクショー！もう一回だアアアア！」

作者「何度やっても無駄無駄！」

マリア「何やってるんですか？」

作者「ワンピースのグラバト2。マリア、次勝負するか？新八のやつが滅茶苦茶弱くて相手にならないんだよ（笑）」

新八「（笑）って何だアアアアア！」

マリア「……いいですわよ、その余裕……私が崩してあげましょう。」

作者「はん、俺のアーロンをなめるなよ！」

新八「……何この雰囲気、続くの？」

第14話：二人っきりの日3（前書き）

作者「さて今回は夕方〜夜の話をします。」

新八「あの・・・なんかいやな予感がするんですけど・・・。」

第14話：二人っきりの日3

ハヤテは台所へ行き晩飯の支度をしていた。その一方ナギは夕方やっているアニメを見ていた。

「まったく、近頃の夕方アニメは子供向けしかやらないではないか！たまには銀魂やらハヤテやらいおんやらイカ娘を放送してほしいものだ！」

「言ってる事作者と同じじゃないですか。」

「あいつが住んでいる所では今ワンピースが再放送されている（今ワードを書いている2011年3月現在。テレビ静岡にて再放送されています）からいいけどこっちは口くな物が放送されていない。幼稚なアニメ放送は止めてほしいものだ！」

「ははは・・・」

ハヤテはナギの愚痴を聞きながら飯の支度をしていた。少しして晩飯が出来た。献立はカレーだったが何かうまそうだったのだ。

「今日はカレーか・・・」

「甘口ですからお嬢様にも食べられますよ。」

ハヤテがこう言ったのでナギはスプーンでカレーをすくい口に運んだ。少しピリツとしたが後に甘口特有の風味が口いっぱいに広がった。

「おいしい！」

「そう言ってもらえるとうれしいです。」

ハヤテは笑顔でこう言った。

夕食を終えたナギはテレビを見始めた。

「む・・・最近のバラエティは何か微妙なのだ・・・。」

「ははは・・・それも作者と言ってる事同じですよ。」

ハヤテは笑顔でこう言った。今ハヤテは台所で皿洗いをしていた。

そんな中、ハヤテの携帯電話が鳴り響いた。

「誰からだろ・・・マリアさんだ。」

手を拭きながらハヤテは携帯電話を開いた。

「もしもし。」

『あ、ハヤテ君。』

「どうかしたんですかマリアさん？」

『実はまだかぶき町の方で外出禁止が解除されなくて・・・それで今夜はお登勢さんの所で一晚泊する事になったの。』

「そうですか。」

『ハヤテ君には悪いけどナギの事ヨロシクね。』

「わかりました。」

ハヤテがそう言った後携帯電話の通話が切れた。

「マリアがどうかしたのか？」

「実は雨のせいで変えられなくなってしまい今夜はお登勢さんの所で泊るみたいです。」

「そうか。わかった。」

ナギはそう言った後またテレビの方を向いた。ハヤテの方も再び皿洗いを始めた。

数時間後、皿洗いを終えたハヤテは少しゆっくりしていた。だが少ししてハヤテは席を立った。

「どうかしたのかハヤテ？」

「ああ、そろそろお風呂に入ろうかと思ひまして。」

「そうか。」

ナギがそう言った後ハヤテは部屋を出て行った。だがナギは思った。ハヤテが風呂に出るまで私は・・・この広い屋敷の中でたった一人・・・外は暗く、大雨の音がザーザー響いている。怖い・・・何を思ったかナギはこの次に次のような事を言ってしまった。

「ハヤテ！私も風呂に入るぞ！」

ナギは後悔している。今背中合わせでハヤテと背中合わせで湯船につかっている。もちろんナギの事も考えてハヤテは目隠しをしている。

「あの・・・お嬢様・・・いい湯ですか？」

「む・・・うむ・・・」

ナギは照れながらこう言った。ハヤテは目隠しをしているが今の状況互いにスツポンポンなのだ。

「あの・・・そろそろ体を洗いたいのですが・・・」

「大丈夫か？私が洗ってやろうか？」

ナギはこう言った瞬間後悔した。何で私はこんなこと言ってしまったんだアアアアアアア！そんな事を思いながらハヤテと共に蛇口がある所へ向かって行った。

「だ・・・大丈夫ですかお嬢様？僕が洗いますので大丈夫ですよ？」

「いいのか？お前今目隠ししてるじゃないか。」

「何とか大丈夫ですよ。」

ハヤテはボディソープを掴み体を洗おうとした・・・だがそれはボディソープではなくシャンプーだった。

「オイハヤテ！それシャンプーだぞ！」

「フエ！」

ナギはハヤテが手にしているボディソープを取ろうとした。だがそれが原因で二人ともバランスを崩してしまったのだ。

「オワアアアアアア！」

「ウワアアアアアア！」

ハヤテはしばらくの間目をつぶっていた。上に何かが乗っかっている。ハヤテは頭をさすりながら体を少し起こした。

「だ・・・大丈夫ですかお嬢様？」

「な・・・何とか。」

ハヤテの上の方でナギの声が聞こえた。そして驚いた。上に乗っかっているのはナギであった。今の状況、ナギがハヤテの上に乗っ

かっている・・・そして・・・そして互いにスツポンポンである。
彼らが目を合わせたその瞬間、沈黙が流れた。そしてこの状況が互いに分かったその時、風呂場に悲鳴が轟き渡った。

第14話：二人っきりの日3（後書き）

おまけコーナー

新八「何やってんだ作者アアアアアアアア！いくらなんでもこれやりすぎだろうがアアアアアアアア！！」

作者「たまにはよくね？」

マリア「よくありませんよ！」

高杉「ククク・・・確かによくねーな・・・」

新八「そうですそうです。・・・って何であんたがここにいるんですか！」

高杉「・・・俺だって出番が欲しいんだよ。」

新八「あの・・・怖い目で見ないでください。」

第15話：二人っきりの日4（前書き）

作者「今回で二人っきり編おしまいでーす。」

高杉「ククク・・・一体最後にどんな事が起きるんだろっな・・・」

新八「アンタ・・・いつの間に前書きレギュラーっぽくなってるんですか・・・。」

第15話：二人っきりの日4

お登勢の所にいるマリアは少し心配だった。ハヤテとナギがまた何かやらかしてないかを。

「本当に大丈夫かしらあの子達？」

「大丈夫アル！ハヤテがしっかりとナギを守っているネ！」

「あの子達を信じればいいと思うわ。」

神楽とロビンがこう言ったのでマリアは心配するのを止めた。

「つてかこつちの方を心配しろオオオオオ！」

びしょ濡れの新八がこう言った。何故彼がびしょ濡れかというと外で埋まっていた銀時とルフィを助けに行ったのだ。

「おい！ルフィ！銀さん！しっかりしろオオオオオオ！」

チョッパーがこう叫んだ。そして二人とも目を開けた。

「お！気がついたか！」

チョッパーが喜んでこう言ったが二人は同時にこう言った。

「君達は誰だ？」

（記憶失ってるウウウウウウウウウウウウ！）

誰もが心の中でこう叫んだ。だがマリアの荒療治のおかげで二人はすぐに記憶を取り戻した。

ハヤテとナギは互いにドキドキしていた。当たり前だ。風呂場で事故とはいえ互いのスッポンポンを見てしまったのだ。

「は・・・ハヤテ。今さっきの事は無しでしょう・・・。」

「そうですね・・・。すぐに忘れましょう。」

風呂を出した後二人はテレビを見ていた。テレビを見終えた後二人は互いの寝室へ向かっていた。

「お嬢様大丈夫ですか？いつも寝る時マリアさんと一緒なんですよ？」

「う……だ……大丈夫だ！私を子ども扱いする」

ビッシャアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ン！

近くの方で大きな雷の落ちる音が響いた。その瞬間ナギはハヤテに抱きついていていた。

「……本当に大丈夫ですか？」

「……ろ……」

「へ？」

「今日は私と一緒に寝ろ！」

「は……はい。」

ナギはまたまた後悔した。今ナギはベッドの中にいる。その隣にはパジャマ姿のハヤテが寝ていた。

「む……むう……」

ナギは横を向いた。横にはハヤテの顔が間近に迫っていた。その瞬間ナギの顔は真っ赤に染まった。

「どうかしましたか？」

「な……何でもない！」

すぐに別の方を向いて目をつぶった。だが。

ドンガラゴツシャアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアン！

近くの方で超ド級の雷の音が響いた。それと同時に停電した。停電したと同時にナギはハヤテに抱きついていていた。

「だ……大丈夫ですかお嬢様？」

「こ……怖いよ……怖いよ……」

暗闇の中ナギはハヤテの胸の中で涙を流し始めた。ハヤテはナギ

を優しく抱きよせた。

「大丈夫ですよ。一晚中僕が付いています。」

暗闇の中ハヤテはこう言った。その言葉を聞いたナギはハヤテの腕の中で静かに眠り始めた。その様子を見ていたハヤテも微笑みを作りすぐに自らもナギを抱きしめながら眠り始めた。

「朝っぱらから何やってんだテメーら？」

朝、二人は銀時の声で目を覚ました。

「……銀さん？」

ハヤテとナギは同時に目を覚めた。そこには呆れた目で彼らを見ている銀時の姿があった。そしてこの状況を理解した。

「……な……何で銀さんがいるんだアアアアアアアアア！」

「マリアを送って行けってババアが言ったからよ。で、オメーらに挨拶していこうと思ったら……この不純異性交遊を見ちまったんだよ。」

しばらくしてルフィ達も部屋に入ってきた。

「お……オメーらそういう仲だったのかよ。」

ルフィが変な物を見るような目でこう言った。

「ハヤテ……それは俺に対する挑戦状か何か？」

ハヤテを睨めつけてサンジがこう言った。

「……アンタはまともだと思ったのですが……」

完全に引いている新八がこう言った。そんな中神楽とロビンとナミは苦笑いでこの状況を見ていた。

「……ご……誤解だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

朝の太陽の日差しが差し込む部屋の中でハヤテとナギの大声が響いた。

第15話：二人っきりの日4（後書き）

おまけコーナー

ヅラ「オイコリアアアアア！いつになったら俺は出るんだアアアア！」

高杉「ヅラア、何だ出てきていきなり。驚いてラーメン少しこぼしただろうが。」

ヅラ「あ、すまぬ。おい作者！俺はいつになったら」

作者「次の長編を期待！」

ヅラ「出来るかアアアアア！」

第16話：バカンス（前書き）

作者「今回から新しい展開です！」

新八「一体どうなるんですか？」

桂「ついに俺が」

作者「……………」

桂「おい、どうしたんだ？」

第16話：バカンス

「なあハヤテ、金持ちにしかできない事って何だ？」

ある日ナギはこう言った。

「金持ちにしかできない事？」

「そうだ。」

ナギにこう言われハヤテは悩んだ。

「うーん・・・冬の中豪華なバカンスに行く事ですかね？」

ハヤテがこう言った次の瞬間ナギは立ち上がりこう叫んだ。

「よし！だったら今からハワイへバカンスへ行くぞ！」

一方その頃、かぶき町商店街にて。神樂がくじを引いていた。そして神樂が引いたのは金色の紙。

「お、大当たりイイイ！」

その直後カランカランと音が響いた。

ハワイ。

「ま・・・まさかハワイに行くとは・・・。」

「まあたまにはいいですね。」

水着のハヤテとマリアがこう言った。

「どうだハヤテ？少しは楽しんでるか？」

ホテルの方から水着姿のナギがやって来た。

「ええ。まあ。」

ハヤテは笑いながらこう言った。

「でも始めてですよ。私達でこういった旅行へ行くのは。」

「ハヤテ達だけではないアル！」

ホテルの方から聞き覚えのある声が響いた。ハヤテが声のした方向を見るとそこには水着姿の銀時達が立っていた。

「ぎ・・・銀さん！どうして？」

「神楽の奴がくじでハワイ行きのチケットを当てたんだよ。」
「すご！」

ハヤテはこう言った。

「まあ皆で楽しみましょう。」

マリアがこう言った。

「あら、皆もハワイに来たの。」

するとまた別の方から聞き覚えのある声が聞こえた。銀時が声のした方を見るとそこには水着姿のヒナギク達が立っていたのだ。

「どうしたヒナギク？大した胸でもねえくせにビキニなんて着てんじゃないね」

しばらくお待ちください

「ヒナギクさん達もくじを当ててハワイへ来たんですか？」

「ええ。」

銀時にお仕置きした後ヒナギクはこう答えた。

「まあ、皆さんで楽しくバカンス」

「おっ！オメーらも来てんのか！」

するとまたまた聞き覚えのある声が響いた。新八が声のした方を見るとそこにはルフィ達が立っていた。

「ルフィさん達もバカンスへ？」

「いや、サニー号で寄っただけだ。」

「そうなんですか。」

ルフィと新八はこう会話をした。

「まー知り合いばかりかけどこういうバカンスもたまにはいい」

「んだよオメーらもいるのか。」

またまたまた聞き覚えのある声が響いた。気絶から目覚めた銀時が声のした方向を見るとそこには土方と咲夜達が立っていた。

「ナギもバカンスへ来たんかい。」

「まーな。咲夜達もそうか？」

「私達もそうだけど途中で土方達と会ってほんでともに行動してたんや。」

「んだよ結局知り合いだらけのバカンスじゃねーか。」

銀時が呆れた。

「おい、俺達がここへ来た理由はある方の護衛のためだ。」

ある方？銀時の頭に嫌な予感が走った。まさか・・・まさか・・・まさかアアアアア！

銀時が困惑している最中、突然ヘリコプターの音が響いた。ヘリコプターは無茶して銀時達の元へ着地した。

「おうオメーら、待たせたな。」

ヘリコプターの中から松平が現れた。後ろにはロープをはおった人物が立っていた。

「悪いな、こんな暑苦しい姿にさせてよ。」

「いいんだ。それよりここがハワイか。」

ロープの人物がこう言った。銀時は確信した。この声の主を。ロープの人物はヘリコプターから飛び降りた。そしてロープを脱いだ。ロープの下はもっさりブリーフ丁だった。そう・・・そのもっさりブリーフ丁の人物とは・・・。

「將軍家は代々・・・バカンスする時ももっさりブリーフ丁だ。」

（しょ・・・しょ・・・しょ・・・しょ・・・しょ・・・しょ・・・しょ・・・よ將軍かよオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！）

あそこが足輕の徳川茂茂だった。

第16話：バカンス（後書き）

おまけコゝナゝ」

高杉「あれ？おまけコーナーの文字変わってね？」

作者「少し変えました。」

新八「何で？」

作者「なんとなく。」

マリア「思い付きですか・・・」

作者「別にいいじゃん」

第17話：バカンス2（前書き）

桂「おい作者アアアアアアアアア！いつになったら俺の出番は」

作者「いい加減しつこいぞデメー！」

第17話：バカンス2

銀時が焦っている間、ハヤテとナギは海の方で泳ぎの練習をしていた。

「大丈夫ですかお嬢様？」

「何が大丈夫だ。人は水の上で浮かない。」

ナギは泳げないのだ。だがハヤテが何とか泳げるようにしようと頑張っているのだ。

「大丈夫ですよ。僕が助けますから。」

「む・・・ハヤテがそう言うなら。」

ナギはハヤテの笑顔を見てこう言った。

その一方將軍はヘリの力を借りてサーフィンして遊んでいた。

「オイあれ、サーフィンじゃなくね？」

「いいだろ、あの人があれで満足なら。」

ウソップとワタルがこう言った。その横ではサンジと松平がナンパをしまくっていた。

「ねえ、ハヤテ君見かけなかった？」

ヒナギクがウソップに話しかけて来た。

「ハヤテ？今ハヤテならナギと一緒に泳いでるぞ。」

「そう・・・一緒に泳ごうと思ったのに。」

「ナギの後でいいだろ。それまでエンジンジョイしようぜ。せっかくのバカンスだからな。」

ウソップは辺りを見回した。神楽は泳げない為ルフィとチョッパーで砂の山を作って遊んでいる。西沢とアテネとナミも近くの砂浜でビーチボールをして遊んでいる。

「そうね。私も歩たちと一緒にビーチボールで遊んでよ。」

ヒナギクはそう言った後西沢達の方へ向かって行った。

ハヤテとナギは泳ぎの練習をしていた。

「いい感じですよお嬢様。大分上手になってきましたよ。」

「そうか！そろそろ私の時代が来るな！」

そんな感じで二人でエンジョイしていたのだが。後ろから大きな波が二人を包み込んだ。

「エエエエエ！何これ」

「は・・・ハヤテエエエエエ！」

突然の出来事でハヤテは少し混乱したがすぐに治りナギを抱きしめ守ろうとしたが結局は波にのまれてしまった。

「な・・・何だこの急展開！」

「言ってる場合か！早く助けねーと！」

ウソップと新八はハヤテとナギの方へ向かったが二人の姿は見当たらなかった。

「くっ・・・こんな時に何やってんだ銀さんは！」

ウソップは銀時の方を見た。銀時はパラソルの下で寝そべっていた。

「銀さん！大変です！ハヤテさんとナギちゃんが大きな波にのめれました！」

「大丈夫じゃね？」

「全然大丈夫じゃないですよ！早く助けに行かないと！」

新八にこう言われ銀時は立ち上がり海へ向かったがすぐに引き戻した。

「・・・何やってんですか銀さん？」

「い・・・いや。何か・・・アレだ。アレアレ。」

「アレって何ですか？」

「浮き輪だ。浮き輪持つてこい。」

「今そんなの必要ありません！遅くなるだけですよ！」

「いやでも・・・。」

「・・・旦那・・・アンタまさか・・・泳げないんですか？」

近くにいた沖田がSモードの目で銀時を見つめた。

「ククク・・・いい年こいて泳げないとか・・・バツカみて〜。」

「土方君・・・じゃあ君はどうなの？泳げるの？飛び込みとかできるの？」

「たりめーよ。小さい頃は『河童のトシ』って言われたからよ。お前と違ってな。」

「俺もそうだよ。ガキの頃は『人間潜水艦の銀』って言われてたんだよ俺は。お前もよーそんな事言っただけは泳げないんじゃないの？」

銀時にこう言われ土方はイラッときた。

「んだとゴラァ！だったらどっちが先にハヤテとナギを助けるか勝負しようじゃねーか！」

「上等だゴラァ！」

銀時と土方は海辺へ向かったが・・・。

「旦那、土方さん。だったらあれからやってくださいよ。」

沖田がこう言った。彼が指さす方向にはとんでもないくらいの高さの飛び込み台。30mは軽く超えてるだろう。

「・・・やってやろうじゃねーか！俺の泳ぎを見て驚くんじゃねーぞ！」

（オイイイイイイ！俺何言ってるのオオオオオ！泳げない癖に何意地張ってる俺エエエエエエエエ！）

口ではこう言ったが心の中で銀時は自分にこうツツコミをした。

「はん、この水泳王の俺にかければハヤテとナギなんか3秒で助けてやるよ。」

（俺何言ってるのオオオオオオ？3秒で助けるとか絶対に無理なんだけどオオオオオオ！ってか俺も泳げないんくせに何言ってるんだアアアアアアア！）

土方も口ではこう言ってるが心の中でこうツツコミをした。だが彼らの足は高台へ向かっていた。

（オイイイイイイ！何で高台に登ってんだ俺エエエエエエエエ！戻ってエエエエエエ！）

（何やってんだ俺！まともに泳げない癖に何意地張ってんだ俺？そもそも俺浮き輪ないと泳げないのに何で飛び込みしようとするの？バカじゃね？何か自分で自分が馬鹿に思えて来た！）

彼らは心の中で後悔していた。だが体は飛び込み台の所まで来てしまった。

「さて始めるか・・・俺の華麗なる飛び込みタイムを。」

（何カツコよく言ってるの俺？何が華麗だアアアアアアア！戻れエエエエエ！俺の脚今すぐカムバアアアアアアアアク！）

銀時はこう心の中で叫んだ。

「テメーら・・・今日の日記はこう書いときな・・・」かつこいい河童が宙を舞った』とな。」

（何俺きざつぽく言ってるんだアアアアアアア！何がカツコいい河童だアアアアアア！）

土方も心の中で叫んでいた。だが二人の体は心に反して飛び込み台から宙へ飛び出した。

（（誰かアアアアアアア！止めてくれエエエエエエエ！））

二人の心がこう叫んだ。そして・・・

バツチイイイイイイイイン！

二人は海面に腹打ちをしてしまった。二人の体はそのまま海面を漂った。そしてハヤテとナギを飲み込んだように大きな波が海面に漂っている二人の体を飲み込んだ。

「・・・銀さアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

この様子を見ていた新八はこう叫んだ。

第17話：バカンス2（後書き）

おまけコーナー

新八「・・・あれ？銀さんって泳げないって設定でしたっけ？」

作者「仕方ないじゃん、そういう設定みたいだし。」

マリア「いいんですか勝手に作って。」

高杉「あいつさく確か泳ぐときウキワ使ってたぞ。」

新八「そうでしたね・・・あと土方さんは・・・」

作者「銀魂って海水浴のシーンあまりないんだよね。」

新八「だからって原作者のせいにするなアアアアアアアア！！」

第18話：バカンス3（前書き）

作者「今回ゲストでできます。」

ツラ「おい！ゲストより俺は」

第18話：バカンス3

新八達は焦っていた。ハヤテとナギだけではなく銀時と土方も波にのまれてしまったのだ。

「ど．．．どうでしょう。」

「どうしようつつたって．．．。」

そんな中、沖田がカメラ目線でこう言った。

「皆、次回から新連載、『沖田のごとく！』連載開始！皆、応援よろしくな！」

「するわけねーだろうがアアアアアアア！」

新八はこう叫んだ。そんな中、ルフィがこう叫んだ。

「オイ誰かが海からやって来るぞ！」

ルフィが指をさす方向には変な帽子をかぶった女の子だった。

「アレ？誰だろ？」

新八がこう言った次の瞬間だった。その女の子はこう叫んだのだ。
「跪け人間ども！私はイカ娘！私がこの腐った地上を侵略してやるでゲソ！」

「な．．．何だってエエエエエエエ！」

新八達は驚いた。

一方ハヤテ達は．．．。

「う．．．う．．．ん．．．。」

ナギが目を覚ました。ナギはハヤテの腕の中で気を失っていたようだ。

「どこ．．．ここ．．．」

体を起こそうとするがハヤテの腕が上にありなかなか起きれない。ナギがハヤテの様子を見たらハヤテは目をつぶったままだった。

「ハヤテ！おい、しっかりしろ！目を開ける！」

ナギが体を揺らしながらこう言うがハヤテは目覚めなかった。

（これはもしかして・・・人工呼吸フラグ！昔から使われている基本的かつ王道のイベント・・・）

ナギはそう思った後ハヤテの顔に近づいて行った。

（ハヤテ・・・目覚めてくれ・・・）

目をつぶり、口を閉じ、ハヤテに人工呼吸をしようとした。だが、何やってるんですかお嬢様？」

ハヤテが目を覚めたのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！ハヤテのドあほオオオオオオオオ！！」

「どこの流川ですかアアアアアアアアアア！」

無人島で二人の声が響いた。

「まあとにかくお嬢様が無事でよかったです。」

「ああ・・・私もよかったよ。ハヤテが無事で。」

色々あったが二人はその後海岸付近で座っていた。横にはSOSと書いてある。

「でもこれからどうしよう・・・」

「大丈夫です。サバイバルなら僕に任せてください。まず始めに今夜寝る場所と食料と水を確保しなければ・・・」

「そうだな。私も協力するぞ！」

そう言った後二人は食糧などを探すため森の中へ入って行った。

「しっかし本当にあるのだな、無人島なんて。」

「そうですね。」

そんな話をしていたら声が聞こえて来た。

「え・・・？他に誰かいるのか？」

「分かりません。とにかく様子を見ましょう。」

隠れながら二人は声の所まで歩いて行った。そしてその声の主とは・・・。

「かゝめゝはゝめゝ波アアアアアアア！・・・いや、違うな？
今のは気を解き放つタイミングがずれていた・・・もう一回！かゝ

め〜は〜め〜」

「何やってるんですか銀さん？」

声の主とはかめはめ波を練習している銀時だった。二人は銀時と合流したのはいいが銀時は恥ずかしさのあまり顔を隠していた。

「・・・言つなよ・・・誰にも言つなよ・・・。」

「分かってます。」

そんな会話をしていたら海岸付近へ戻っていた。

「あれ・・・戻ってきちゃった・・・あ。」

ここでハヤテは何かを見つけた。何かとは海岸の中心で寝そべっている土方だった。彼は一筋の大きい雲を見つけこう呟いた。

「あの雲・・・中にぜってーマヨネーズ王国がある！」

土方はこう言った。だがそれを見ていたハヤテ達に気付きすぐに合流した。土方も恥ずかしさのあまり顔を隠していた。

「・・・誰にも言つなよ。」

「分かってますけど・・・。」

「結局マヨの話だよ。」

「オメーのジャンプネタよりはましだろうがアアン？」

「やるのか？ トツシー君よお？」

「その呼び方は止める。」

「まあまあ、喧嘩は止めてくださいよ。今それでも危ない状況なんですから。」

ハヤテが喧嘩を止めたのだ。その時だった。

「オイハヤテ！ 向こうに洞窟があるぞ！」

ナギが指をさした。その方向には一つの大きな洞窟があった。彼らはその後洞窟に入ったのだが予想以上に暗かった。

「うわ・・・結構暗いですね。」

「ハヤテエ・・・」

ナギはハヤテにくつついて震えていた。

「大丈夫ですよお嬢様。僕がついてます。」

「俺らも頼りにしろよ。」

銀時がこう言った。だが彼はハヤテの手をつないでいた。

「・・・何ですかコレ？」

「何って・・・アレだよアレ。」

「アレって・・・後銀さん・・・手汗がすごいんですけど・・・」

ハヤテは察知した。銀時は怖いのが嫌いだと。

「何その目？別にビビってねーけど！オバケなんかこわくねーよ！」

「どうだか、目があちらこちら行ってるぜ。」

土方が冷やかにこう言ったのだが彼の足はかなり震えていた。

「そういうお前だつて足が震えてるじゃねーか！」

「これはアレだ！結構寒くて足が震えてんだよ！」

銀時と土方の喧嘩が始まってしまった。ハヤテとナギは完全に呆れた目で彼らを見ていたのだが・・・。

ジヨ・・・ら・・・

声が聞こえたのだ。その声を聞いた銀時と土方はすぐに地面に伏せた。ナギは泣きそうになりハヤテに抱きついていていた。そしてハヤテは声のした方へ向かった。そして・・・そこにいたのは・・・続く！

第18話：バカンス3（後書き）

おまけコーナー

新八「あの・・・最後の方で出てきたのって何？」

作者「次回をお楽しみに！」

高杉「イカ娘はどうなるんだよ？」

作者「次回をお楽しみに！」

マリア「そればっかですね。」

第19話：バカンス4（前書き）

イカ娘「はっはっは！私はイカ娘！本編のついでに前書きと後書きも侵略」

高杉「させねーぞ！」

新八「唯一の僕たちの活躍の場を」

マリア「とらせてたまりますか！」

作者「てなわけが始まります。」

第19話：バカンス4

一方その頃、新八達はイカ娘と遭遇していた。

「何だこいつ？変な髪型だな。」

ルフィがこう言った。その言葉を聞いたイカ娘は少し怒りルフィに向かって触手攻撃を放った。

「オワア！何すんだオメー！」

「言葉には気をつけるでゲソ！」

「向こうが戦う気マンマンなら・・・」

そう言った後、ゾロは腰の三本の刀を手に取った。

「こっちも反撃するぞ！」

「オッケー！今回の俺はスーパーだぜえ！」

フランキーも戦闘隊形に入った。その横ではウソップが武器を取り出し、ナミも天候棒を装備していた。

「皆さん、僕も手伝います！」

「新八だけにいい格好させたくないアル！私も行くネ！」

「私も行くわ！」

木刀を装備した新八、傘を手にし振り回している神楽、木刀・正宗を持つているヒナギク。誰もが戦う気満々だ。

「ひ・・・酷いでゲソ！一対多数何て卑怯でゲソ！」

「そんな事・・・」

「知るかアアアアアアア！」

この場にいた全員がイカ娘を襲い始めた。

で、ハヤテの方は声のした方向へ向かっていた。そしてハヤテは絶句した。そこにあったものとは！

「洞窟の中で・・・ずっとスタンバっていました。」

その瞬間、銀時の飛び蹴りが飛んだ。声の主とは狂乱の貴公子・いや奇公子、桂小太郎だったのだ。

「何でオメーみたいなバカがこんな所にいるんだよ。」

「それは俺のセリフだ。銀時、まさか貴様もガンダーラを目指してここへ。」

「西遊記か！つーかガンダーラってインドの事だ！普通に飛行機乗れば行けるじゃねーか！」

「はっはっは、何を言っているんだ銀時？ここが真のガンダーラじゃ。」

「んな訳あるかアアアアアアアア！」

銀時のシャウトが洞窟内に響いた。

「どうした？そんな大声出して。」

土方が辺りを警戒しながらヅラの所へ来た。で、ヅラと目があつた。

「・・・何でオメーがここにいるんだ？」

「それは俺のセリフだ。真選組もガンダーラ目指して」

「んな訳あるか。オメーみたいなバカな事はしねーっつーの。」

土方は完全に呆れた。その後ハヤテ達は洞窟の外へ出て作戦会議を始めた。

「で、どうすんだ？」

「誰が何をするか決めねーとな。」

「そうですね、土方さんの言う通り当番を決めましょう。」

「分かった。じゃあ俺はリーダーをしよう。」

「待て待て、オメーがリーダーだとがこの先力オスになる。俺がリーダーの方がいいだろ？」

「それなら私に任せろ。」

「無理だ。だったらこの銀さんが」

「いや、俺がやる！」

「だからヅラは止めた方がいい！」

「ヅラではない！桂だアアアアア！」

ここで口論が始まった。だがハヤテの言葉ですぐに終わった。

「土方さんがリーダーの方がいいじゃないですか？真選組でいろいろと経験を積んでるんですし。」

「そうだな。俺からもそう願いたい。まとめ役は真選組でもやってるからな。」

「おつ、流石フォロ方。」

「やはりフォロ方ではないとこのメンバーをまとめられないな。」

「フォロ方っつー呼び方は止める。」

という訳で土方はリーダーとなり役を決めて行つた。銀時は食糧調達係、ハヤテは調理係、ナギは土方の補佐、そして桂は水分補給係となった。

「いいか、当分の間いろいろと我慢していかなければならない。」

「糖分もか？」

「たりめーだ。もちろん俺もマヨが吸えないという事は覚悟してる。」

「じゃあエリザベスに」

「当分会えない。当たり前だ。」

「よし、会議が終わつたので各自係となつた仕事を始める！」

「分かつた。」

という訳で漂流生活一日目が始まった。

一方その頃。ルフィ達はイカ娘と激しい戦いをしていた。

「皆の集、何をしているんだ？」

サーフィンから戻つて来た茂茂がこう言った。彼を見たイカ娘はこう確信した。こいつはお偉いさんだと！

「はああ！」

イカ娘は触手を使い茂茂を襲った！
「しょ・・・しょうぐウウウん！」
新八の叫びが砂浜に響いた。

第19話：バカンス4（後書き）

桂魂！

桂「はっはっは！ついに俺降臨！今回の後書きはこの俺の主演」

高杉・新八・マリア「「「んなことさせるかアアアアアアア！」」「

桂「ギャアアアアアアアアア！」

高杉「ツラア、テメーみたいな馬鹿にこのコーナーは侵略させねえ！」

新八「それがたとえ桂さんでも！」

マリア「容赦はしませんわ！」

桂「たまにはいいだろうがアアアアア！ようやく本編に」

高杉「俺は本編に出てねーぞ。」

桂「あ・・・その・・・」

作者「次回お楽しみに」感想よろしく」

第20話：バカンス5（前書き）

作者「たびたび思っけどさあ、これってラブコメだよね。」

高杉「何言ってるんだ作者のくせに。」

第20話：バカンス5

前回のあらずじ、イカ娘は將軍に襲いかかりました。という訳で將軍は絶体絶命だった・・・のだが！

シュツ！

どこからか風を斬る音が響いたのだ。そしてイカ娘の触手の半分が切断されたのだ。

「な・・・何イ！」

イカ娘は驚いた。そんな彼女を見て茂茂はこう言い放った。

「將軍家では代々・・・パツツリゴムもっさりブリーフ派だ。」

「いや・・・関係ないでしょ。」

新八はこう呟いた。だが当のイカ娘は・・・

「な・・・何て奴でゲソ！」

「驚くんかい！」

新八達のツツコミが空高く響いた、

で、ハヤテ達の方は。

「一人で大丈夫かな・・・銀さん？」

「大丈夫だろ。あの人なら。」

ハヤテとナギは二人でこう話していた。当の銀時は。

「つたく・・・どうすりゃいいんだよ・・・どこにも食糧が見当たらねーぞ・・・。」

食糧探しに悪戦苦闘していた。そんな中歌声が聞こえた。

「やるなら今しかねーZURA♪やるなら今しかねーZURA♪」

「何歌ってんだオメーはアアアアアアアア！」

銀時の飛び蹴りが桂に命中した。

「銀時！こんな時こそ歌を歌おう！」

「バカかオメー！こんな時に歌なんて歌えるか！そんな暇あったら水を探せ！」

「はっはっは！実はな・・・俺はついに水を探し当てたのだ！」
「マジで！」

まさかの展開、銀時は桂に連れられて水のある所へ向かったのだが・・・その水は・・・温泉だった。

「オイこれ、温泉じゃねーか！」

「いいではないか！疲れた時にリラックス」

銀時は一応この事を土方に伝えようと元の場所へ戻って行った。

「温泉か、すげーもん見つけたな。」

「はっはっは、俺の日ごろの行いが良かったんで神様が」

「何が日ごろの行いだ？オメーの場合はバカしかやってねーだろ。」

「で、どうするんだこれ？」

ナギはこう言った。しばらくして銀時達は話し合った。

「まーいいんじゃない？疲れた時に利用すれば。」

「ですね。」

という訳で彼らの作業は進んだ。数時間後。焚火の前には銀時が取って来た魚が焼かれていた。

「まー今この状況だから仕方ねーか。」

土方はマヨネーズをかけたくて仕方なかったがこんな状況だから我慢した。

「我慢しねーとな・・・そのかわり帰ったら糖分祭りだな。」

銀時は魚をかじりながらこう言った。てな訳で一日目の夜が過ぎて行った。

「ふー、この先大丈夫かな・・・？」

桂が見つけた温泉に入りながらハヤテはこう呟いた。今銀時達は夜の狩猟へ出かけている。

「銀さん達も大丈夫だというし・・・いいのだろうか・・・？」
「チャプン・・・」

ハヤテの後ろ側で誰かが温泉に入る音がした。

「誰だろ？」

ハヤテは後ろを見た。そこにはナギがいた。

「え．．．．．」

「ふえ．．．．．」

しばらくの間沈黙が流れた。そして二人の声が響いた。

「は．．．ハヤテも入っていたのか．．．。」

「はい．．．そうです．．．。」

二人は赤くなりながら互いに背を向けていた。そして時間が過ぎて行った．．．その時だった。

．．．が．．．い．．．が．．．よ．．．

どこからか声が聞こえた。声を聞いたナギはハヤテに抱きついた。

「お．．．お嬢様！」

「怖いよ．．．ハヤテエ．．．ハヤテエ．．．。」

ナギは怖さで震えていた。だがナギは気がつかなかった。お互いがスッポンポンだと。

「あの．．．お嬢様．．．今この状態だと．．．色々と問題が．．．

」

ハヤテにこう言われナギは気付いた。ナギは顔が真っ赤になったが。

．．．ず．．．が．．．や．．．

再び声が聞こえたのだ。ナギは無我夢中でハヤテの胸に抱きついた。

「誰だろ．．．この声．．．。」

ナギを胸に寄せながらハヤテは辺りを見回した。そして理解した。声の主を。

「やるなら今しかねーZURA♪やるなら今しかねーZURA♪攘夷がJOY♪JOYが攘夷♪」

声の主とはツラだった。

「ん？何やっているんだ二人とも？青春か？」

桂にこう言われ婦たちは気付いた。スッポンポンで抱き合ってい

ると。それに気付いた二人の声が高高く響き渡った。

第20話：バカンス5（後書き）

おまけコーナー

新八「あの・・・これまずいんじゃないんですか・・・？」

作者「た・・・多分大丈夫だよ。だってこれ書いてたの大体3月頃だし。」

マリア「結構時間がたってますわね。」

作者「仕方ないじゃん、他にも連載がかえてんだし。」

第21話：バカンス6（前書き）

作者「いやゝ最近熱くなってきたねゝ。」

高杉「そうだな・・・早く半袖にしたいぜ。」

新八「だったらその暑苦しい着物を脱いだらどうです?」

高杉「・・・大人の事情で着物は脱げない。」

第21話：バカンス6

ハヤテ達が遭難し一週間後。

「ま・・・マヨネーズ・・・」

「と・・・とうぶん・・・」

銀時と土方に異変が起きたのだ。

「・・・あれだけ我慢我慢言っているのに・・・。」

「駄目だなあの二人・・・。」

ハヤテとナギはこう呟いた。一方ヅラは・・・。

「ただいま帰ったぞ。」

「あ、桂さ・・・何それ？」

桂が手にしているのは変な形の魚だった。

「これはな、俺が頑張って釣ったこの島の主だ！」

「いいんですか主を釣って！」

ハヤテはこう言ったが桂は意気揚々として魚を調理し始めた。

一方新八達はサニ―号にいた。

「大丈夫かな・・・もう一週間よ。」

ヒナギクがこう呟いた。彼女は心配で心配でロクに眠れてないのだ。もちろんそれは西沢とアテネも同様だった。

「大丈夫よ。ハヤテ達は無事よ。」

「ええ。元気を戻して。」

ナミとロビンがヒナギクの肩を叩いた。その頃上空では。

「どこにあるんだ？土方の死体は？」

「な・・・何だこいつは？人の事を心配してないでゲソか？」

「こう言う奴だ、気にするな。」

沖田の発言に驚くイカ娘に対し近藤はこう言った。今彼らは將軍のヘリを使い上空からハヤテ達を探している。だがなかなか見つからないのだ。そんな中、近藤はある島を見つけある事に気付いた。

「とつつあん！望遠鏡か何かある！」

「ああ、どうした？」

將軍の隣にいた松平から望遠鏡を借り島を見て見た。

「やっぱり・・・！」

望遠鏡の中にはSOSと書かれた島が映し出されていた

「皆！確信は無いがあ島に行こう！SOSの文があった！」

「マジで！おい！あの島に着陸するぞ！オメーらも下の奴らに連絡しろ！」

「おう！」

その後、ヘリはその島へ向かって行き、ルフィ達も近藤の知らせを受け島へ向かった。

その頃ハヤテ達は桂が釣った主の魚を食べていた。

「大丈夫かな主を食べて・・・」

「気にするな、今は緊急事態だからな。」

桂は黙々と主を食べていた。

「おい、銀さんや土方はどうするんだ？」

ハヤテは銀時達の方を見た。彼らは未だに「とつぶぐん」「マヨネズ」と言っている。

「駄目ですね・・・完全に。」

「・・・ああ。」

その直後であった。

「ハヤテ~~~~~！ナギ~~~~~！無事か~~~~~！」

海の方からルフィの声が聞こえたのだ。

「お嬢様・・・今の・・・」

「まさか・・・」

ハヤテとナギは海の方を見た。そこには見慣れたサニー号の姿があった。

「ルフィさん！」

「おっ！あいつ等の姿が見えた！無事だぞ！」

「ホントか！よっしゃ、皆喜べ！あいつら無事だぞ！」

ウソップの声に反応し皆喜んだ。

「ヨホホホホ！いやゝよかったゝ！」

「よかったわね、皆。」

「よかったよゝ！」

「それより早く迎えに行かないと！」

というようにサニー号は喜びの色一色だった。

その後、ハヤテ達はルフィ達に保護された。

「ありがとうございます。皆さん。」

「シッシシ！礼なんていいよ、ああいう時は助けねーとな！」

笑顔でルフィはこう言った。

「それにしても無事でよかったです。・・・一部を除いて。」

新八は地面を転がりながら「とうぶゝん」「マヨネーズ」と言っている銀時達を見てこう言った。

「それにしてもとんだバカンスになってしまったな。」

「気にしないでください。お嬢様や皆さんが無事なら僕はそれでいいですよ。」

ハヤテは笑顔でこう言った。

一方松平の方は。

「ヅラア、何でオメーが無人島にいたんだ？」

「俺はガンダーラへ行こうと」

「オイパイロットの人、今すぐエジプトの砂漠へ行つて下せえ、このバカを砂漠へ」

「砂漠？まさかガンダーラへの道」

「こいつ・・・何か色々と電波臭いでゲソ！」

桂の様子を見てイカ娘はこう言った。

第21話：バカンス6（後書き）

おまけコーナー

新八「たびたび思いますけどこれ本当にラブコメですか？」

高杉「どっちかつーと銀魂のノリだな。」

作者「え．．．ええ．．．」

マリア「シリアスな空気は作らないんですか？」

作者「．．．実は次回から新展開でちょっとシリアスっぽくなります。」

高杉「マジか!？」

作者「はい。というわけで次回お楽しみに。」

第22話：事故（前書き）

作者「今回からちよつとすごい展開になります。」

高杉「何かシリアスっぽいぞ。」

作者「では見ていってください。」

第22話：事故

時期は12月、あと少しで冬休みなのだ。なので生徒達は浮かれていた。

「うーん・・・もう冬休みですか・・・早いですね。」

「そうだな。」

ハヤテとナギはこう会話をしていた。その後、机の上にあるバツクを持ち帰路についた。歩道の前を歩きながらナギは小言をつぶやき始めた。

「さーて・・・明日は休むか。」

「また明日も行ってくださいよ・・・。」

小言を聞いて呆れたハヤテはこう言った。

「何を言う！このキングオブニートにこのような事を言うな！」

「自分でそのような事は言わないでください・・・。」

「フンだ！何が何でも私は休む・・・っておわあ！」

ナギは振り返ろうとしたがそのはずみでバランスを崩し道路側へ倒れてしまった。しかも目の前には巨大なトラックが走行していた。
「ウワアアアアアアアア！」

「お嬢様！」

ハヤテはすぐにナギを起こそうとした、だがトラックはもうナギの近くにいた！ハヤテは急いでナギの元へ向かった！

シュッ！

ナギの体が宙に舞った。だがそれはハヤテがナギを歩道側へ飛ば

したからだ。そしてハヤテは・・・。

キイイイイイイイ！

ドオオオン！

ナギは一瞬何があったのか分からなかった。立ち上がりハヤテの姿を探した。そして彼女の目にぐったりと倒れてるハヤテの姿が映った。その姿を見てナギの頭は真っ白になった。

「・・・・・・・・あれ？ここは？」

ナギが我を取り戻した時、今いた場所と違う事に気付いた。ここは病院らしく隣には神楽とナミが座っていた。

「やっと気付いたか。」

「皆・・・・・・・・どうして・・・・・・・・」

「覚えてねーのか？ハヤテがお前を助けるために道路に飛び出して・・・・・・・・そして・・・・・・・・ひかれたんだよ・・・・・・・・」

銀時がこう言った。それを聞いてナギは言葉を失った。

「ハヤテ・・・・・・・・ハヤテはどうなった！」

「かなり危ない状態らしいわよ・・・・・・・・外傷は大したことないけど・・・・・・・・辺りどころが悪くて・・・・・・・・」

静かな声でナミがこう言った。

「クソ・・・何でこうなるんだ・・・こうなるんだったらタッチの漫画読むんじゃないかった・・・」

悔しそうにサンジがこう言った。だが誰もつつこまなかった。

「・・・オイサンジ・・・空気読めよ。」

「悪い、少しは空気変えないと思って・・・皆ゴメン。」

その後、誰も喋らなかった。聞こえてくるのはどこかにある時計の針の音だけ。そのくらい誰も喋らなかったのだ。そんな中で数時間過ぎて行った・・・。

ブツン！

目の前にある手術中のランプが消えた。中から医者が現れた。

「皆さん・・・手術は成功しました・・・」

その声を聞いて誰もが喜びの声を上げた。

「いよっしゃアアアアア！」

「流石ハヤテアル！あの程度で死なないと思ってたもんね！」

「よし！明日は宴だアアアアア！」

「ヨホホホホホ！もう私喜びで胸いっぱいです！私が骸骨だから胸ないんですけどー！」

「あの・・・もう少し話を・・・」

「オイ、ハヤテのとこ行こうぜ！」

「ナギも行くアル！」

医者話も聞かず銀時達は手術室へ入って行った。ベッドの上にはハヤテが横になっていた。

「よおハヤテ！よかったな！手術が成功して！」

「銀ちゃん小声で『ヤベーよマジヤベーよホントどうすればいいん

だよこの状況。葬式ん時金払うんだっけ？ねーよそんな金』と言つてたね！」

「オメー何縁起でもねー事言うんだコノヤロー！」

「ああ、確かにこう言ってたな。」

「ウソップ！オメーもそんな事言うのか！」

「だって皆知ってるぜ。なあチョッパ！」

「ああ、小声って言ってるけど結構声漏れてたぞ。」

そんな騒ぎの中、ナギはハヤテのそばへ寄って行った。」

「よかった・・・ハヤテエ・・・ゴメンな・・・私の為にこんな目にあつて・・・」

泣きながらナギはこう言った。そしてハヤテの目が覚めた。

「おっ！お目覚めのようだ！」

誰もがハヤテの周りに集まった。

「・・・れ・・・すか？」

「どうした？少しは元氣出せ！」

ルフィがこう言った。だがしかし次のハヤテの言葉で誰もが絶句したのであった。

「あなた達は・・・誰ですか？」

第22話：事故（後書き）

おまけコーナー

新八「オiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!なんかすごい事になってるんですけどオオオ!!」

作者「では次回の予告、記憶喪失編が開始します。お楽しみに」。

高杉「楽しめるか?」

マリア「結構シリアスですよ。」

作者「……………まあ期待しててください。」

第23話：記憶喪失（前書き）

作者「今回からちょっとシリアスなストーリーとなります。」

高杉「まあ見て行ってくれや。」

第23話：記憶喪失

翌日、ヒナギクは少し不機嫌だった。何故ならハヤテが欠席なのだ。

「珍しい日もあるんだな。ハヤ太くんが欠席なんて。」

「そうだな。」

「今日はナギちゃんも休みだね。」

「ナギちゃんの休みは毎回で珍しくないだろう。」

生徒会三人娘の会話を聞いていたヒナギク。そんな中である想像をしていた……。

「ハヤテ……私と……合体しろ！」

「いいですよ。」

「オメーは何想像してんだ。そんな想像してたら18禁にされるだろうが。」

ある人物の声でヒナギクは我に戻った。目の前には銀時がいた。

「エエエエエエエエエ！何で銀さんがここに！」

「オメーが想像中の時からだよ。」

「お、銀さんじゃないか。」

「何か用なの？」

三人娘にこう言われ銀時は前の黒板の方へ向かった。

「えゝ今日からハヤテとナギはしばらく休みます！理由は聞くな！以上！」

そう言つて教室から出ようとした。だが。

「待てエエエエエエ！」

虎鉄が銀時のズボンの裾を掴んだ。そのはずみで銀時は転倒した。
「ててて……何すんだこのホ。野郎！」

「俺の綾崎が休みてってどういう事なんだ！しっかりと説明しろ！」

「だから理由は聞くなつて言つただろうがアアアアアア！テメーは教室の真ん中でスクワットしてろ！」
そう言つて足早に帰つて行つた。

一方ハヤテの方は神楽とナミと会話をしていた。

「いいアルか？お前はナギの執事アル！」

「し．．．羊？」

「いや、羊じゃなくて執事。」

「僕が．．．？羊？」

「いや執事じゃなくて羊。」

「神楽、逆になつてゐるわよ。」

「仕方ない．．．じゃあこれで思い出すアル！」

神楽は何か取り出した。それは前にいろいろあつて虎鉄から奪取したハヤテの女装時の写真だつた。

「．．．誰ですかこのかわいい女の子。」

「アンタよアンタ。」

まさかの一言でナミは少し呆れた。

「ふう．．．それより自分の名前は覚えてる？」

「．．．僕の名前は．．．海馬瀬戸。」

「何で遊戯王の海馬が出てくるのよ！」

「確か．．．デュエルモンスターズで全国一位の実力を持っている」

「だからなんでそうなるの！」

ハヤテの変わりつぷりにナミはため息を漏らした。

「はあ．．．いつになったら戻るのやら。」

「うーす、今帰つたぞー。」

玄関の方で銀時の声がした。

「あ、銀さん。皆の反応どうだった？」

「心配されると困るから今こいつが記憶失つてゐるってことは言つてねー。しばらく休むつて伝えただけだ。」

「その方がいいわね。何やかんだでハヤテモデルからねー。」

ナミと話した後銀時はハヤテの方へ行った。

「おい、何か思い出したか？」

「あ、金時さん。」

「俺は銀時だ。俺が金時だったら銀魂のタイトル完全にアウトだろうが。アニメ復活がパーになるだろうが。」

そう言った後銀時はハヤテの近くに座った。

「いいか？お前は綾崎ハヤテ、この三千院家の執事だ。」

「ダンガンロックの羊？」

「何でそうなるの！」

「冗談で言いました。」

「コイツ殴っていい？」

少し怒りながら銀時はこう言った。

その頃ナギはというと。

「・・・私のせいだ・・・私のせいでハヤテは・・・」

ずっとベッドの中で涙を流していた。部屋の外にいるマリアはナギの事を心配していた。

「まだ部屋から出てこないの？」

ロビンの声がした。少ししてロビンとチョッパーがナギの部屋の前へ来た。

「ええ・・・ずっと泣いてるみたいなの・・・自分のせいだって・・・」

「そう・・・部屋には入ってないの？」

「慰めようと部屋に入ろうとしたんですけど・・・一人にしてくれって・・・」

マリアはため息をついた。

「ナギも精神的に苦しいんだ。あいつは自分のせいでハヤテがあんなったのを強く後悔している・・・俺にもどうしようもできないよ・・・」

チョッパーが下を向いてこう言った。

「チョッパ―、あなたは悪くないわよ・・・本で調べたけど記憶喪失は一時的な物みたいね・・・何かのはずみで記憶がよみがえる・・・」

「でもそのきっかけがないと・・・どうすればいいんだ？」

彼らが悩んでいる間、ずっとナギの泣き声がつつすらと聞こえていた。

第23話：記憶喪失（後書き）

おまけコーナー

作者「インフニッティ」

高杉「おい、ファンタボインフニティやってる暇あったら小説書け。」

作者「まあやってるっちゃー書いてるぜ。」

新八「どんな感じですか？」

作者「まあまあお楽しみは後でとっておけ。」

第24話：記憶喪失2（前書き）

作者「エンジェルビーツ・・・静岡でもやれ」

新八「それツイッターでつぶやけやアアアアア！……！！！」

第24話：記憶喪失2

三千院家門前、今ここにヒナギク達がいたのだが……。

「悪いな、今俺ら以外屋敷の中に入れないんだよ。」

「すまないが日を改めて来てくれないか？」

門の前にはウソップとフランキーがいて通してくれないのだ。彼らもハヤテが記憶喪失なのをしてヒナギク達が傷つかない様にしているのだが……。

「何故だ！何故綾崎に会わしてくれない！」

「そうよ！私達はハヤテ君のクラスメイトなのよ！」

ヒナギク達がギャーギャー言っている中フランキーは小声でウソップに語りかけた。

（おい、どうすればいいんだ？）

（今考え中だ……あ。）

（思いついたのか？）

（ああ。でもこれでうまくいくかどうか……）

（一か八かやってみる。）

そう言われたので咳払いをしてウソップはこう言った。

「実はハヤテはインフルエンザにかかっている。」

「ハヤテ君いったわよ。生まれて一度もインフルエンザにかかってないって。」

「それに三千院家の医者達は目茶苦茶優秀でどんな病気も一発で治すって聞いたよ。」

この台詞を聞いたウソップは苦し紛れにこう言った。

「……実はそのインフルエンザは新種で……あの……その……感染はしないけどそのインフルになったらかなり高い確率で死ぬってもので……」

「嘘ね。」

「だから嘘じゃないって」

ガシ

ヒナギクはウソップの首を絞めそのまま持ちあげた。

「皆、今よ！屋敷の中へ潜入するわよ！」

「……おう！」「……」

その後、虎鉄と生徒会三人娘は屋敷へ入って行った。ヒナギクもウソップを地面に叩きつけ屋敷に入って行った。

「あああああ！しまった、屋敷ん中に入れちまった！」

フランキーは慌てたがすぐにある事を思い出した。そしてポケットからトランシーバーを取り出し連絡を始めた。

ヒナギク達は庭の中を走っていた。

「あと少して屋敷よ！」

「はあはあ……あと少して綾崎に」

虎鉄の鼻の下が伸びた直後、上から何かが降って来た。それは虎鉄に命中した。

「虎鉄君！」

「ゴムゴムの網！」

ルフィの声がした。

「ふえ？」

油断していたら生徒会三人娘はルフィの手に捕まってしまった。

「皆！」

「悪いな、今は関係者以外立ち入り禁止なんだ！」

「私達だって……」

ヒナギクはルフィの隙を窺い神速の速さで移動し剣の間合いに入った。

「ハヤテ君の関係者よ！」

ズシャアアア！

「おわあああああ！」

ヒナギクの攻撃によりルフィはバランスを崩し手の中にいた三人娘は解放された。だが。

「わおーん！」

定春の急襲によりまたまた捕まった。

「皆！」

「ヒナギク！いい加減諦めて帰れ！」

「・・・一目くらいハヤテ君に会わせてたって・・・いいでしょうが！」

ヒナギクは飛び上がり上からルフィを襲った。だがルフィも負けではない。

「仕方ねえ・・・ゴムゴムのライフル！」

「甘い！」

ヒナギクはゴムゴムのライフルをかわした。だが急に体が重くなつた。

「ま・・・まさか・・・」

そう、ルフィは霸王色の覇気を使っていたのだ。

「これで終わりだ。帰ってくれ・・・」

ルフィは地面に倒れているヒナギクに対しこう言った。

ナギの部屋。まだナギはこの部屋で泣いていたのだ。

「あら？ナミ、どうしたの？」

「ロビン、ナギの様子どう？」

「まだ泣いてるみたい・・・。」

「実は今さっきハヤテにナギの事言ったら会いたっていいだして・・・。」

「そう、その方がいいわね。何か思い出すかもしれないわ。で、ハヤテは？」

「神楽がハヤテを連れてきていると思うけど。」

「おーい！ハヤテ連れて来たアルー！」

離れたところで神楽の声が聞こえた。少しして神楽がハヤテを連れてナミとロビンの所へやって来た。

「あの・・・僕に合わせたい人って・・・誰ですか？」

「私が言つてたナギアル！お前のご主人様アル！」

「僕の・・・ご主人様？」

「まあそんなとこつつ立てないで部屋に入りましょ！」

ナミがナギの部屋のドアノブを掴み扉を開けた。

第24話：記憶喪失2（後書き）

おまけコーナー

新八「この話なんか長くなりそう・・・」

高杉「何かシリアスっぽいからもうちょい続くんじゃね？」

マリア「そうですね〜。」

新八「おわ！！何なんですかその衣装！！紅白のオオトリみたいな衣装じゃないですか！！」

高杉「小林幸子から奪ったのか？」

マリア「出番を増やすためにちょっとゴージャスにしてみました。」

新八「そうですか・・・」

高杉「で、その作者は・・・」

作者「PSストアいつ復旧するんだアアアアア！！」

高杉「・・・駄目だこりゃ。」

第25話：記憶喪失3（前書き）

新八「ちよつとオオオオオオ！！ツイッター見たけどあと少しでク
ライマックスって本当ですかアアアアアア！？」

マリア「初耳ですわ！！」

高杉「マジかよ！？ってか作者のヤローは！？」

新八「い・・・いません！！」

マリア「草の根分けても探しますわよ！！」

第25話：記憶喪失3

ナギの部屋はカーテンでしめられていて暗かった。まだ彼女はベツドの中で涙を流していた。まだ自分のせいでハヤテが記憶を失ったと思い責任を感じているのだ。そんな中、ドアの外にはナミ達が出た。

「あら？鍵がかかっているのかしら？」

ドアノブを回そうとしているのだが。鍵がかかっているため回らない。

「ナギ？ちよつといい？」

ナミが声を出したが部屋からは返事が来ない。

「まだ泣いてるのかしら・・・」

「折角ハヤテを連れて来たのに。」

このロビンの言葉を聞いたナギは少しハツとした。部屋の外にハヤテがいる・・・。

「・・・ハヤテ・・・」

小さく呟いた後、ナギは扉を開けた。

「あ、ようやく開いた。」

「この子が・・・僕の主・・・」

ナミの隣にいるハヤテがこう呟いた。

「・・・そうだ・・・」

その後、しばらく沈黙の空気が辺りを包んだ。ナミとロビンと神楽は何か気まずかったから部屋から離れた。

「・・・なあ・・・本当に何も覚えてないのか・・・私の事も・・・」

「・・・はい・・・」

「ハヤテ・・・お前はハヤテだ・・・って銀さん達から聞いたか？」

「・・・銀さん？」

「銀髪为天パの人だ。」

「あのちよつとうるさい人ですか。」

「ああ。」

しばらくハヤテとこんな会話をしていた。

「・・・すみません・・・一つ願いを聞いてもいいですか？」

「何だ？」

しばらく間を開けてハヤテはナギに向かってこう言った。

「僕の事を・・・教えてください・・・しっかりと・・・」

話を聞いた後ナギは少し考えた。もしこれでハヤテの記憶がよみがえるなら何でもしようと思ったのだ。

「ああ・・・それでお前の記憶が戻るなら。」

一方ヒナギク達を倒したルフィは彼女らを背負ってウソップとフランキーの所へ来ていた。

「ウソップ、フランキー、ヒナギク達を家に戻してくれないか？」

「倒したのか？」

「いや、覇気を使った。」

「しかし・・・ハヤテが記憶を失ってるって聞いたら・・・こういったどうするのか・・・」

「ああ、こいつらも何やかんだでハヤテに気があるからな。」

「・・・それ・・・本当なの？」

ヒナギクの声が聞こえた。その声を聞いたフランキーは驚いた。

「な・・・何で・・・」

「今気がついたのよ・・・その話・・・本当なの！」

「・・・」

ヒナギクの質問にルフィ達は黙秘した。

「ねえ、答えてよ！何で黙ってるの！」

「・・・悪いな・・・ちよつと質問には答えられないんだ。」

フランキーはそう言つとヒナギク達を屋敷の門の外に出した。

「・・・という事だ・・・記憶・・・戻ったか？」

ナギは記憶を失ったハヤテの前に起きた出来事の全ての事を教えた。

「・・・そうなんですか・・・。」

「そうなんですかって・・・まだ記憶戻ってないのか・・・。」

「ええ・・・すみません。」

下を向いてハヤテはこう言った。

「気にするな。地道に記憶を取り戻して行けばいいさ。」

「はい。」

しばらくの間をおいてハヤテはこう言った。

「・・・あなたは・・・僕の事が好きなんですか？」

「・・・フエ！」

突然のセリフにナギは驚いた。

「な・・・何でそんな事を！」

「だって・・・あなたは僕に対してとても優しいですし・・・僕の事を話している時のあなたの顔・・・とても生き生きしてました・・・それでもしかして・・・」

「そ・・・そんなわけ・・・うう・・・」

ナギは顔を真っ赤にして下を向いた。まさかハヤテにこんな事を言われるなんて思っても無かった。そんな中、ハヤテはナギに近づいてきた。

「・・・教えてください・・・僕の事を・・・全て・・・」

そう言ってナギの顔に近づいた。

「バカ！そ・・・そんなに顔を」

「ちょ！暴れないで下さ」

ドサツ！

ベッドの上に座っていたナギは暴れてバランスを崩し下の床に倒れてしまった。その反動で近くにいたハヤテも床に落ちて行った。

「オイオイ、うるせーな何やってんだ？」

「何か落ちるような音が聞こえたけど何かあった？」

部屋からの音を聞き取って銀時とナミが部屋に入ってきた。で、

彼らの視界にはハヤテの上で寝そべっているナギの姿があった。

「・・・二人きりだからって・・・ヤバいんじゃないのこれ？」

「何やってるのナギ？」

「ご・・・ごごごごご・・・誤解なのだ――――――――――」

「――！――」

部屋中にナギの声が響き渡った。

第25話：記憶喪失3（後書き）

おまけコーナー

作者「はあ・・・はあ・・・あいつらマジしつこい・・・」

律「クヒヒヒヒ・・・」

作者「律、何でこんなところに・・・」

律「みんなーーーーー！こんなところにいたぞおオオオオオオ！
！」

作者「あつ！！ちょ！！バカ！！」

俺の運命どうなる？続く！！

第26話：記憶喪失4（前書き）

作者「俺生誕20周年祭りじゃー！」

マリア「でもその前に・・・。」

新八「クライマックスに関して話したい事が・・・。」

第26話：記憶喪失4

その後、冬休みに入るまでハヤテの記憶喪失は治らなかった。銀時やルフィ達もいろいろ頑張っていたが結局は無駄に終わった。

「ったく・・・いつになったらコイツの記憶戻るんだ？」

「さあ？」

ソファーに座って銀時とルフィはこんな会話をしていた。ふと、外を見ると雪が降っていた。

「・・・はあ・・・世間はクリスマスクリスマスつつて騒がしいのによ、俺らは色んな意味で騒がしいぜ。」

「そうだな。」

会話した後、大きなため息をついた。

一方自室にいるナギは少し憂鬱だった。クリスマスは彼女にとって特別な日なのだ。

「もう一年か・・・」

クリスマスはハヤテとナギが始めて会った日なのだ。そしてそこからハヤテはナギの執事となったのだ。

「ハヤテ・・・早く元に戻ってくれ・・・」

小さな声でこう呟いた。

その頃、神楽はナミやマリアと話をしていた。

「もう我慢ならないネ、こうなったら力づくでハヤテを元に戻すアル！」

「それでさらに悪化したら」

「じゃあマリアは他に案があるの？」

ナミにこう言われマリアは口を閉じた。

「・・・はあ・・・もう手がなかったら神楽の言う通り力づくで」

「待って下さい。実は極秘で三千院家の発明家たちに記憶喪失を治

す薬を発明させているんです。」

「だったらそれを早く言わんかい！」

ナミのツツコミボイズが響いた。しかしマリアは続けてこう言った。

「だけどまだ完成してませんの・・・いつ完成するかもまだ分からない状態だつて言っていました。」

その言葉を聞いてナミは言葉を失った。

「けど少しの辛抱アル！これでハヤテの記憶が戻るならいいんじゃないアルか？」

「そうね。」

そう言つて彼女らは薬の完成が早くなるよう心の中で祈り始めた。

そして数日後のクリスマス、マリア達三千院家の関係者は色々と忙しかった。何故ならここでパーティーをするのだ。

「で？何で俺らが手伝いしなきゃいけないんだ？」

声を出したのは土方、彼は今パーティーの手伝いをしているのだ。「仕方ねーだろ？人手が足りないんだからよー。」

ゾロが土方に向かってこう言つた。

「あのさあ、お前ら同時に声出すの止めてくれない？何か同じような声何だけど。」

近くにいた銀時が土方とゾロに向かってこう言つた。

「そうか？」

「俺らは気にしないけどな。」

「こっちは気にするんだよ。」

銀時が軽くため息を出した後、銀時の横から神楽が顔を出した。

「二人とも、同時にレッツパーリイって言ってくれアル！」

「何でだ？」

「いいから！」

神楽が何度も迫つて来るので土方とゾロは仕方なくあのセリフを空に向かって叫んだ。

「レッツ！パーティ！」

青空の中に土方とゾロの声が響いた。しばらくして遠くの方から「筆頭！」とか「兄貴！」とか声が聞こえた。

「・・・俺部屋に戻るわ。」

「俺も。」

そう言っ て土方とゾロは部屋に戻って行っ た。

「ったく、何やらかしてんだ神楽、あいつらだっ て恥っ つーもんが・
・・」

後ろを振り迎えて神楽にこう言っ たが神楽の姿は無かっ た。

「・・・」

「あ、銀さん。土方さんとゾロさんが部屋に戻っ たので代わりに準備を手伝っ てください。」

通りかかっ たマリアが銀時に向かっ てこう言っ た。銀時は逃げよっ としっ たがマリアに捕まっ た。

一方ナギは考え事をしていっ た。

「・・・仕方ない、多少強引だがあの方法しかない。」

そう言っ てナギは立ち上がり部屋を出て行っ た。

「ったく・・・あいつのせいで飛んだ恥をかいたぜ。」

「ああ・・・全くだ。」

廊下で土方とゾロはこんな会話をしていた。途中ナギと会っ た。

「あ！土方にゾロ！いい所にあっ た！」

「あん？どうしっ た？」

「私に協力してくれ！」

2人に向かっ てナギはこう言っ た。

第26話：記憶喪失4（後書き）

おまけコーナー

新八「で、本当なんですかクライマックスって。」

作者「はい。もう最終回の原稿書き終わりました。」

マリア「でも何で？」

作者「その話はまた最終回で……。」

第27話：記憶喪失5（前書き）

作者「さて、記憶喪失編の続きをやりましょうか。」

新八「あ、はい。」

マリア「まあ頑張ってください。」

第27話：記憶喪失5

その夜、ナギはある場所にいた。隣にはハヤテがついて来ている。
「何ですか？僕をどこに」

「私をお前が始めて会った場所へ行くんだ。」

ついた先は何も変哲もない自動販売機だった。だがナギにとっとはここは重要な場所なのである。

「ここは・・・ただの自動販売機・・・」

「・・・確かに記憶がないお前が見たらただの自動販売機だな、だが私にとっては大切な場所なのだ。」

そう言いながらナギはある事を思い出していた。それはハヤテがナギに行ったあの言葉である。

『君が欲しい！』

ナギの脳裏で何度も何度もハヤテのこの言葉が再生されている。しかし今のハヤテは何も知らない、ナギは小さくため息をついた。その時だった。

「三千院ナギだな？」

後ろから黒服黒フードの男性二人が現れた。

「そうだが？」

ナギがそう言った瞬間だった。男の一人がハヤテとナギ目がけてスプレーを発射し、目くらましをしたのだ。

「キャ！」

「うわ！」

「よし、今のうちだ！」

男の一人がナギを連れ去って行った。

「た・・・助けてくれー！」

男達はナギを車につれ、去って行った。

「しまった！」

ハヤテは辺りを見回し、何か無いか探した。そして目の前に放置自転車を見つけた。

「行くしかない！」

そう言つて自転車に乗り込み、ペダルをこぎ始めた。

「オイ、これでうまく行くのか？」

「知らん？」

車内にて、ナギは男達と会話をしていた。実はこの男達は土方とゾロでありナギが自分を助けてその衝撃でハヤテの記憶を元に戻そうと考えたのだ。

「これでうまく行ったらいいんだけどな。」

「ああ。」

そう返事を返した後、ナギは後ろを向いた。ハヤテが追っかけてくるかどうか気になったのだ。

「ハヤテ……」

「来たか？」

「まだだ……」

運転している土方はとりあえず車を近くの港に止め、外に出た。

「ふゝ、クリスマスの日にこんなことするなんてな。」

「まったくだ。」

倉庫の方から銀時の声が聞こえた。彼もまた、ナギに頼まれ黒服の男に変装しているのだ。

「こんな茶番劇であいつの記憶が戻るか？」

「だから知らんと言ってるだろうが！まあいい！私はあの倉庫に入つて捕まってるふりをする！お前らはしっかりと役を演じろ！」

そう言つてナギは倉庫の方に入つて行つた。

「俺らも行くか。」

「ああ。」

銀時達もそう言つて倉庫の中に入つて行つた。だがその後ろでは

謎の男が怪しい事をしていた。

「あゝゝゝ何がクリスマスじゃゝゝゝそんなもん、このマッチで燃やしてやるゝゝゝ！」

その男は手に持ったマッチで倉庫を燃やそうとしているのだ。彼の近くにはガソリンらしき水がばらまかれていた。そしてガソリンに向かってマッチを放り投げた。

「ん？何か焦げ臭くないか？」

「気のせいじゃね？」

銀時の質問にゾロがこう言った。倉庫の中は何もないが中央には縄で手足を縛っているナギがいる。

「どうしたのだ？」

「何か銀時が焦げ臭いって言ったからよー。」

「俺も何か焦げ臭くなってきた。」

「ちよつと様子見てくる。」

銀時がこう言って倉庫の外を見て見ようとしたが・・・。

ボワツツツ！

目の前に大きい炎が現れた。

「な・・・何じゃこりゃアアアアアアアア！？」

「知るかアアアアア！つかこれまずいんじゃない？」

焦る銀時達、だがこんな中でもナギはハヤテが助けしてくれると信じていたのだ。

（ハヤテ・・・早く来てくれ！）

第27話：記憶喪失5（後書き）

おまけコーナー

作者「記憶喪失編、次回でおしまいです！」

マリア「で、次は何をやるんですか？」

作者「クライマックスに重要な場面をやります。まあ期待してください。」

第28話：記憶喪失6（前書き）

銀凧「今回で記憶喪失編クライマックス!!」

マリア「見て行ってくださいね。」

第28話：記憶喪失6

「え！ナギがない！？」

パーティー会場にて、マリアがこう声を出した。

「ええ、それどころかハヤテ様や銀時様達までも。」

SPの一人がこう言った。マリアは先ほどからナギの姿を見なかったのでもしやと思っていた。

「私があの子を探します、SPの皆さんはパーティー会場の護衛を！」

「は・・・はい！」

マリアはその後、走ってナギを探しに行った。

で、ナギの方かというと。

「オワアアアアア！」

「消せ！火を消せエエエエー！！」

「無理だアアア！完全に火の勢いが強くて無理だアアア！！」
絶体絶命だった。

「おい、こんな時こそ落ち着いてタイムマシンを探そう。」

銀時は近くの壁に頭を打ちつけながらこう言っていた。

「お前が落ち着けエエエエー！！」

「叫ぶな、叫ぶと余計に体力を使う。それより私の縄をほどいてくれないか？」

「あ・・・ああ。」

銀時はナギに近づき、手足の縄をほどいた。

「で、どうすんだ？無理矢理扉を壊して。」

「それならおれに任せろ。」

ゾロが扉の前に立った。

「こんなもん、俺が斬って」

「お前・・・刀は？」

「ハヤテ！ハヤテ！」

ナギの目の前には額から血を流しているハヤテの姿があった。数分後、倉庫を放火した男は捕まり、銀時達もマリアによって発見されこの作戦がばれ、マリアからきついお仕置きを食らった。ハヤテは怪我がちよつと深かった為、三千院家の家に運ばれていったのだがその日一日はずつと眠っていたのであった。

翌日。

「ん．．．何か．．．苦しい．．．。」

ハヤテは自室で目を覚まし、布団を見て見た。体の上にナギが乗っかっていてハヤテを抱きしめるように寝ていたのだ。

「お．．．お嬢様！いつの間に！」

「む．．．ハヤテ．．．は！」

何かに気づいてナギは飛び起きた。

「い．．．今．．．お嬢様って．．．。」

「ん？ええ．．．何かあったんですか？あとここ最近の記憶が――

――

「ハ．．．ハ．．．ハヤテEEEEEEEE！」

ナギはハヤテに抱きついた。目には涙が浮かんでいる。

「EEEEEE！ちよ、ど．．．どどうしたんですか！」

「よかった．．．よかったよ．．．ずっと．．．。」

泣きながらナギはこう言った。そしてハヤテは自分が記憶を失っていたという事に気付いた。

「お嬢様．．．迷惑をかけて．．．すみませんでした．．．。」

「いいんだ．．．お前が元に戻ったのなら．．．それでいいんだ。」

「でも．．．僕の為に色々と――」

「いいつて言ってるだろうが！お前が元に戻った、それでいい！」

顔を上げてナギはこう言った。

「ええ．．．。」

「とにかく良かったな、ハヤテ。」

笑顔でこう言ったナギ。記憶が戻って一件落着だったが・・・その日からハヤテの中でもやもやが生まれた。

第28話：記憶喪失6（後書き）

おまけトーク

銀風「あともう少しでクライマックスです!!」

高杉「それでも結構やったんだな。」

銀風「ええ、大体半年はかかりましたね。」

マリア「そうですね・・・。」

銀風「最終回の時はちよつと裏話もしようかと考えています。まあこれから応援よろしく!!」

第29話：大晦日（前書き）

銀風「ヤベーよ、夏休みマジで暇だよ。しかも今日（7月20日現在）台風きてるから出かけられねーし」

マリア「だったら小説を書いてればいいんじゃないんですか？」

銀風「ファンタボインフニティをずっと——」

マリア「だから小説を書いてればいいんじゃないんですかあ？」

第29話：大晦日

時は流れて大晦日、今ハヤテは自室である事を悩んでいた。それは記憶が戻った日以来、もやもやが生まれたのだ。いくら考えてもその理由が分からない。実際執事の仕事に影響は無いものの気になつて気になつてしょうがないのだ。

「何だろ・・・このもやもや感は何？」

「何か心配ごとでもあるのか？」

ベッドの方から声がした。振り迎えて見るとそこにはナギがいた。

「い・・・いつの間に！」

「気にするな。それより」

ベッドから降り、ナギはこう言った。

「初日の出を見に行こう！」

声を高く上げてこう言ったのだ。ハヤテもすぐに了解のサインを出し、二人で初日の出を見に行つた。

ハヤテは特製の自転車でナギを乗せて海岸へ向かつていた。

「そう言えば一年前もこうやって初日の出を見に行きましたねー。」

「そうだな。あの頃もお前が私の為に自転車で海に向かったな。」

しばらくペダルをこいてるとみた事のある原付が目に入った。

「あれ？ハヤテじゃねーか。」

「銀さん！どうしてここへ？」

声の主は銀時だった。ハヤテが質問をしてきたので銀時はこう答えた。

「いま妙のそこから逃げてんだよ。ギリギリだったぜ、下手したらあの暗黒物質さっしんへいきを食わされてたからよー。」

「そ・・・そうなんですか・・・。」

冷や汗を垂らしながらこう言つたハヤテ、しばらくしてナギが声

を出した。

「あれ？銀さんではないか。」

「よー、お前もいたのか。何だ？仲良くデート中かコノヤロー？」

「「そんなわけないでしょうがアアアアア！」」

二人のツツコミがシンクロした。銀時は「仲がいいこった、じゃあ俺は逃げるスピード上げっから。またなー。」と言って去って行った。

「・・・先を急ぎましょうか。」

「ああ。」

ハヤテも海へ向かおうと必死にペダルをこぎ始めた。

数分後、ハヤテとナギは海岸に来ていた。

「おお！海だー！まだ真っ暗だけど。」

「海が見れてよかったでしたね。」

「まだ初日の出は見えてないがな。・・・それより。」

ナギはハヤテに近づいてこう言った。

「お前、何か悩んでるだろ？」

「えっ？」

その通りだった。今ハヤテはなぜかもやもやしているのだ。それがナギに全とお見通しだったのだ。

「私に言ってみろ、私がお前の悩みを聞いてやる。」

「でも・・・お嬢様に解決できるか」

「何だとーーーーー!!」

ナギはハヤテを抑え倒した。

「おわーーーー!!」

「私はお前の主だ、私の為にお前はいつも働いているが・・・たまには・・・私にもお前のために何かさせてくれ。」

「お嬢様・・・。」

「私の一言で解決できるかどうか分からないが・・・言ってみろ。」

「え・・・えーっと・・・その前に・・・どいてくれますか？」

照れながらハヤテはこう言った。で、その後でハヤテはそももやの話聞いた。そしてナギの答えは・・・

「気にするな!!」

「エエエエエエエエエエエエエエエエ!」

短く、かなり分かりやすい答えだった。

「お前は色んな事を気にし過ぎだ、肩の力を弱めろ。」

「は・・・はあ。」

「それに――」

ナギはそう言ってしばらく間を開けた。

「いざという時・・・私を守る力がないとしたら・・・駄目だろ?」

「・・・ええ。」

「だからさ、たまには私にも何かお前のために何かさせる。」

「・・・・・・」

「お前が私の事を大事に思ってくれてるという事は知っている・・・だけど・・・私もお前の事を大事に思っている。だから・・・困った時は私に話せ。」

笑顔でナギはこう言った。その笑顔がハヤテのもやもやな霧を一気に晴らした。

「・・・分かりました。」

「さて、まだ初日の出が出る気配はないし・・・寒いから・・・ハヤテ、近くに来て・・・」

「分かりました。」

ハヤテはナギの所へ近づき、隣に座った。そこからは二人で色々話していた。だがもやもやが晴れた事は言わなかった。数時間後、ハヤテとナギの視界に初日の出が映った。隣にいるナギは目を煌かせて喜んでいて。

「おお!始めて見たぞ!こんなにすごい物だったのだな!」

「ええ、僕も始めて見た時は驚きました。」

その後、ナギはハヤテの手を握ってこう言った。

「ハヤテ。」

「どうしました？」

しばらく間を開けてナギはこう言った。

「今年もよろしく頼むぞ。」

「・・・はい。わかりました。」

初日の出を見終えた後、ハヤテとナギは屋敷に帰った。ハヤテは自室に戻った後、ベッドの上で小さくこう呟いた。

「やっと分かった。僕は・・・お嬢様の事が・・・好きなんだ。」

第29話：大晦日（後書き）

おまけコーナー

ヒナギク「・・・アハ・・・アハハハ・・・」

西沢「ハ・・・ハヤテ君・・・」

アテネ「・・・この二人どうしましょう？」

高杉「知るか、つか勝手に後書きに出るなよ。驚いて手に持っていたポテチこぼしちゃったじゃねーか。」

第30話：デート1（前書き）

銀凧「今回のデート編で。。。1とか付くのは今回でラストです」

マリア「じゃあもう終わるんですか・・・」

銀凧「まあ最後まで見てくれや」

第30話：デート1

一月の中頃（これ書いてるの六月だったけど気にするな！）ナギはテレビのCMを見ていた。

「皆おいでー！夢と希望の王国、『ヘンラーランド』へおいでよ！」
そんなCMが流れていた。

「ハヤテー。」

「どうしましたかお嬢様？」

「い・・・一緒に個の遊園地に行かないか？」

「いいですよ。」

てな訳でデートが決まった。

数日後、ハヤテはナギと共にヘンラーランドへ来ていた。その後ろに怪しい集団がいた。

「いいですか？何とか二人にはれないように尾行しましょう。」

「了解。」

その怪しい集団とはマリア&万事屋&麦わらの一味&丁度暇で来ていた土方と山崎だった。何故土方と山崎が巻き込まれたという丁度近くにいたからマリアに誘われたのである。

「ったく、この仕事終わったら最高級のマヨ頼むぜ。」

「俺の場合は最高級のミントトン用のラケットとあんばんで。」

「分かってます。その変わりしっかり協力して下さいね。」

「へーへー。」

「本当に大丈夫かこいつら？」

「すぐに迷うアンタよりましだと思っけど。」

ゾロに向かって山崎はこう言った。

「あ、動きましたよ。」

「マジでか！」

「私達も移動しましょう！」

そうしてハヤテとナギの後を追うようにマリア達も移動し始めた。

ナギは異様にドキドキしていた。当たり前だ、今はハヤテとデート中なのだ。

「うっ・・・ハヤテ・・・始めてだな・・・二人つきりでこういう所でお出かけなんて」

「誰だオメー？」

「へ？」

ナギは驚いた。何故か隣にいたのはブレイブルーのラグナだったのだ。

「おわー！何であの中二病のロリコン賞金首がここにいるんだー
ー！？」

「誰が中二病のロリコン賞金首だアアアアアア！
空高くナギとラグナの声が響いた。」

一方ハヤテの方もドキドキしていた。最近、ナギに対する気持ち
が前と変わったので何かドキドキするのだ。

「お・・・おお・・・お嬢様・・・な・・・何かジュースでもど
うですか？」

「え？おごつてくれるんですか？」
「は？」

ハヤテは驚いた。隣にいるはずのナギの声が何故か変わっていた
のだ。不審に思ったので後ろを振り向くとそこにはブレイブルーの
ノエルがいた。

「何であなたがこんな所にいるんですかー！？」
「ゲスト出演です。」

ハヤテはその後、迷子センターへ向かった。

「まったく、いつの間にハヤテは迷子になったのだ！」
「オメーが迷子じゃねーのかよ？」

ドカ！

「イテ！何すんだクソガキ！」

ハヤテと離れ離れになったナギは迷子センターにいた。ついでにラグナも。

「あら、お譲ちゃん迷子？」

迷子センターの役員がナギに聞いてきた。

「ちがう、私の連れが迷子なのだ。」

「あらら、お譲ちゃんの名前は？」

「だーかーらー！私が迷子ではなーーーーーい！」

目を開いて怒ったオーラを出すナギ。だがそこに。

「お、ナギじゃねーか。」

聞いた事がある声が聞こえた。振り向いてみるとそこにはゾロが立っていた。

「あ・・・あのゝ迷子ですか？」

「ちげーよ、あいつらが迷ったんだよ。」

「え・・・えーっと・・・名前は――」

「ゾロだ。あと俺が迷子じゃ――」

しばらくして迷子センターから迷子のお知らせが流れた。

「迷子のお知らせです。迷子センターにナギちゃんとゾロさんとラ

グナさんの――」

「だーかーらー！私は迷子ではなーーーーーい！」

「誰が迷子だアアアアアア！！」

「何で俺の名前も言われるんだアアアアアア！？」

スピーカーからこんな声が響いていた。

数分後、ナギは怒っていた。何故ならマリア達が極秘にハヤテとナギのデートを追尾していたのがばれたのだ。

「つたく、マリアは私のいう事が信じられぬのか？」

「ええ。」

「ハッキリ言うのかよ！」

マリアの隣にいた新八が叫んだ。

「マリアさん、大丈夫です。僕がちゃんとお嬢様を守りますから。」
ナギをフォローしようとハヤテがこう言った。マリアもこのハヤテの発言を信じこう言った。

「ハヤテ君、ナギをお願いしますね。私達も私達でエンジョイしますから。」

「おおお！じゃあ遊び放題アルか！」

近くにいた神楽が歓喜の声を上げた。

「ええ。」

「よっしゃー！じゃあ早速行くアルー！」

神楽は走り始めた。後を追うようにルフィや銀時達も走り出した。

「じゃ、僕達も行きましょうか。」

笑顔のハヤテがこう言った。

「おう。」

ナギもこう返事をしてデートが再開した。

第31話：デート2（前書き）

銀風「昨日買ったドラゴンボールZスパキンメテオおもしろー!!」

新八「その前に小説を――」

マリア「これもう書き終わったと言っていましたたよね・・・」

新八「・・・・・・・・・・」

第31話：デート2

迷子騒動の後、ハヤテとナギは遊園地の中を歩いていた。

「お嬢様、もう迷わないでくださいね。」

「何を言ってる！迷子になったのは・・・」

頬を赤に染めてナギは反論しようとしたが、ハヤテの手がナギの手握った。

「フェッ！」

「僕がお嬢様の手を握ってますから、絶対に離さないでくださいね。」

「お・・・おう・・・。」

手を握るハヤテも手を握られるナギも顔が真っ赤だった。で、彼らが向かった先は・・・お化け屋敷。

「お嬢様、何でここへ？」

「何かかなり怖いって有名で——」

「んだよ、お前らもここからかよ。」

後ろから声がした。その声の主は銀時だった。後ろにはルフィやマリア達もいる。

「銀さん！」

「何でビビりな銀さんがここへ？」

「お前は一言多いんだよ！俺はなー、周りからビビりビビり言われてっから汚名返上でここに来たんだよ！」

「そうなんですか・・・」

まあそんな会話をしていたらいつの間にかハヤテ達の出番となった。周りのオブジェがかなり不気味だったのでナギはハヤテに抱きついていて。そんな一方でサンジはこんな妄想をしていた。

暗闇の中、ナミとロビンの悲鳴が聞こえる、そして二人はサンジの両手に捕まる・・・

「グッヒヒ」まさか暗闇の中でこんな事やあんな事・・・おっと！」
妄想モードからすぐに戻るサンジ。で、すぐに彼の両手が握られ

「マジで！ ナニさん、ロビンちゃん」

彼は自分の両手にいる人物を見た。その人物とは……銀時と土方だった。

「……………何してんの？」

「何って……アレだよアレ。」

「そうだよ、アレだアレアレ。」

「だからアレって」

「アレはアレだろうが。」

「だから教えるよ、アレ」

「アレはアレでアレはアレでアレが――」

「アレアレアレうるせーんじゃアアアアアアアアアア！」

新八の飛び蹴りが銀時と土方の後頭部に命中した。

しばらくした後、ハヤテ達はお化け屋敷の中に入っていた。中はかなり不気味で目茶苦茶怖いという情報は当たっていた。

[illegible]

「イギヤアアアアアアアアアア!!」

「ウアアアアアアアアアア！」

銀時と土方の悲鳴にハヤテとナギは驚いた。

「いきなり変な声出さないでくださいよ！」

「オバケよりびつくりするだろうがアアアアアア！」

「び……ビビって何かねーよ……。俺の美声でオバケを逆に驚か

「んんん」

「何が美声だ？完全に裏声ってたじゃねーか。」

「んだコノヤロー！」

「やるかコノヤロー！」

銀時と土方は睨め合いを始めてしまった。ハヤテ達はもほつとこ
うと思つて先へ向かった。だが。

ポンポン。

誰かが銀時の肩をたたく音がしたのだ。

「ま・・・まさか・・・オバケか・・・」

「そ・・・そそそそそそんなわけねーだろ。」

会話する銀時と土方の声はかなり震えていた。その声を聞いてい
たハヤテとナギも背筋に冷たい何かを感じた。

「じゃ・・・じゃあ誰かが俺の肩を？」

「る・・・ルフィじゃねーのか？」

「俺は前の方にいるぞ。」

奥の方からルフィの声が聞こえた。

「・・・見て見ようぜ。」

「何で俺も？」

「アレだよ・・・アレだから・・・」

「そうか・・・アレだからか・・・」

「いいか？1、2の、3で振り向くぞ！」

「ちよつと待て、3の『さ』で振り向くのか？『ん』で振り向くの
か？」

「『ん』に決まってるだろうが！いいか、いくぞ！」

「1」

「2の」

「「3！」」

声を上げて銀時と土方は後ろを振り向いてみた。そこにいたもの
とは！

「お化け屋敷でバイトしながら・・・ずっとスタンバっていました。

」

次の瞬間、銀時と土方の飛び蹴りが今のセリフの主の顔面に命中した。もうおわかりだろう。このバカの正体を。そう、この声の正体はツラであった。

「ツラではない！桂だアアアアアアア！！！！！！！！」

第31話：デート2（後書き）

おまけコーナー

高杉「オイ、最終回について何か言う事ないか？」

銀風「あゝ、実は最終回とその前の話は少し長めに書きました」

新八「マジで!？」

銀風「マジで頑張りました。期待してください」

第32話：デート3（前書き）

銀風「さて、デート編も今回でラストです」

新八「感想お願いしますね!!」

第32話：デート3

「何でオメーがこんな所でバイトしてんだよ？」

銀時があいつに質問している。そのあいつというのはヅラの事である。

「ヅラではない！桂だアアア！」

「誰に言っただおい？」

「それより・・・何でここでバイトを・・・」
横からハヤテがこう言った。

「攘夷志士だけでは食っていきぬのでな。」

「攘夷志士って仕事かよ。」

「つてかそれで金でるの？」

色んな声が上がった。とりあえず土方は沖田を呼び桂を連れて行かせた。

「副長、次どこ行きます？」

「次って・・・お前遊ぶ気マンマンだろ？」

「はい。」

いい返事で山崎はこう言った。

「私ジェットコースターへ行きたいアル！」

「偶然だな、これからジェットコースターへ行こうとハヤテと話してたんだ。」

「んだよ、またお前らと一緒にじゃねーか。」

「いいじゃねーか、そっちの方がおもしろーし！」

てなことでジェットコースターの方へ向かって行った。

数分後、長い行列を抜けハヤテ達はジェットコースターに乗りこんでいる。

「うわゝ、結構本格的ですね。」

「家にある遊園地とは大違いだ。」

ハヤテとナギは手をつなぎ色んなアトラクションを乗ったりして行った。その日一日はハヤテもナギもとても思い出に残った出来事であった。

「ちょっと待て！俺はどうなるんだアアアアアアアアアア！？」
どっかの木の枝に引っかかっている銀時がこう叫んだ。

第32話：デート3（後書き）

おまけコーナー

高杉「この物語もそろそろ最終回か・・・」

銀風「何か長かったですね」

新八「そうでしたね」

マリア「そういう話はまた後でも・・・」

第33話：告白（前日）（前書き）

銀凧「さて…ついにクライマックスの話になりました!!」

新八「長かったですね」

マリア「そうですね」

高杉「最後まで見てくれ…まだ最終回じゃないが」

第33話：告白、前日、

春、桜の季節（これをかいているのは6月下旬だけど）。ハヤテは心の中でいつナギに告白しようか悩んでいた。一方ナギもいつかはハヤテに告白したいと思っているのだからなかなかできないのだ。「はぁ……本当に……どうしようかな……」

ため息をついた後、ハヤテは自分の周りで恋愛相談できそうな人を考えて見た・・・

・銀さん：あの恋愛したことなさそうだからパス

- ・新八さん：パス

・土方さん：マヨラーだけどあの人恋愛に興味なさそうに見える

・近藤さん：パス

・沖田さん：変なこと言いそう

- ・桂さん：パス

- ルフィさん：パス

・ゾロさん：あの人も恋愛に興味なさそう

・ウソップさん・変な事言いそう

・サンジさん・パス

・チヨツパー：パス

・フランキーさん・パス

- ブルックさん：パス

ここでハヤテは頭を抱えて心の中でこう叫んだ。

(僕の周りで恋愛そうなん出来る人いねー！！！)

という訳でハヤテは近くのネットカフェのチャットで相談することにした。ちなみにハヤテのハンドルネームは『借金執事』である。「えーっと・・・」恋の相談があります。誰か相談に乗ってくれま

せんか？』・・・と。これでいいのかな？」

そう言っただけハヤテは送信のボタンをクリックした。するとすぐに『フルーツポンチ侍』から返事があった。その内容とは・・・。

フルーツポンチ侍：そんな事で悩むな！もし貴殿が男なら度胸を持つて告ればいい！簡単に言えば当たって砕けるだ！

「うわ・・・何かすごい人が来たよ。」

小声で言いながらハヤテは次のように返事を返した。

借金執事：フルーツポンチ侍さん・・・気持ちは分かりますけど・・・いざ告白という時にちょっと緊張してしまうかもしれませんし・・・それに相手の人が僕自身をどう思っているかで悩んでいるんです。もしよかったら相談に乗ってください。

と返事を返して数秒後、すぐにフルーツポンチ侍から返事が来た。その内容とは。

フルーツポンチ侍：フルーツポンチ侍ではない。桂だ！！

この書き込みを見たハヤテは驚いた。理由は知人だったからだ。

「な・・・何やってんだこの人・・・。」

その後、またバカから新たな書き込みが加えられた。

フルーツポンチ侍：さあ、恋に悩んでいる君も攘夷志士に入ってぶっ飛ばしちゃえ！

（駄目だこいつ・・・何ともできない・・・）

心の中でそう言った。だが今度は別の人が書き込みをした。

サキュバス墮天使：ちょっと、何うぶな男の子をいじめてんのよ？
恋の相談はお姉さんにお・ま・か・せ・よ♪

名前と文章で多分女性だろう。あのバカ（ヅラ）よりは相談が出来るそうだな。そう思ったハヤテはサキュバス墮天使に返信した。

借金執事：サキュバス墮天使さん。実は恋の相談があるんです。聞いてくれますか？

サキュバス墮天使：いいわよ。何ならお姉さんが夜の相談も聞いてあ・げ・る♪

ハヤテはこの書き込みを見てちよつと引いた。ちなみにこのサキュバス墮天使の正体は……

「おい律！真面目にやれ！」

「えゝちよつと待ってよゝ今面白い所なんだよゝ。」

ゲスト出演の律だった。そんな中チャット世界では……

ナイス ガイ：じゃあ僕の夜の相談に乗ってください。

バカが一人罌に引つかかった。

サキュバス墮天使：嘘じゃボケエ！お前は一人でナニでもいじくつてろ！

フルーツポンチ侍：そんな君、一緒に攘夷しないかい？

猛辺りでカオスな空間が広がっていた。ちなみにこのバカと言うのは……

「ちくしょー！アレ嘘だったのかよオオオオオオオオ！！」

エロコツク、サンジであつた。そんな中また変な奴が現れたのだ。

歌姫：私の歌を聞けー！

（いきなり何だー！ー！ー！ー！ー！ー！？）

突然『歌姫』という人物が乱入してきたのだ。ちなみにこの人はミクである。ミクのコメントの下には何か歌詞があつた。

「な・・・何だろう・・・この人・・・」

と思つたのもつかの間、また変な奴が現れたのだ。

海からの使者：おお、これがネットの世界でゲソか！

死神：つたく・・・つまんねえ場所だぜ・・・

（何か来たー！ー！ー！ー！ー！ー！）

ハヤテはまたまた心の奥底で叫んだ。この海からの使者というのはイカ娘の事であり、死神というのはラグナの事である。ハヤテが頭を抱えている最中でもこのバカ共はネット世界で騒ぎまくつていた。だがそんな中。

「ん？また誰か来たのかな？」

そう言つて画面を見るとそこには『銀色の侍』と『麦わら帽の海賊』という人物がログインしていたのだ。

銀色の侍：よー、借金執事よ。オメー、恋の事で悩んでんのか？

麦わら帽の海賊：そんな事なら俺達に言えばいいのによー。

この台詞を見た後、ハヤテは辺りを見回した。まさか銀時とルフィが自分の為にチャットをやっているのかと思つていたのだ。

銀色の侍：まーあれだ。今悩んだって無駄なことだ。

麦わら帽の海賊：やれる事は今やっちまおうぜ！

銀色の侍：俺はお前の恋を応援する。

麦わら帽の海賊：シッシッシ、俺もだ！

彼らの応援コメントが心に残ったハヤテ。そして彼は決意した。ナギに告白するという事を。決意した後、ハヤテはログアウトしてカフェから出て行った。だがハヤテがログアウトしても話は続いていた・・・そして『銀色の侍』と『麦わら帽の海賊』がこんな事を話した。

銀色の侍：話があります。実は俺、彼女がいます。ドMで眼鏡でめっちゃボインのくノ一です。今も半裸で俺の横に寝ています。

麦わら帽の海賊：俺も実はめっちゃ美人の海賊と付き合っています。今は彼女の膝枕でパソコン打ってます。

実は銀色の侍と麦わら帽の海賊は銀時とルフィではなくてさっちゃんとかんこくであつた。更に彼女らはこんな事を書いたのだ。

銀色の侍：ここでお話があります。この記事を見た人、銀さんとさっちゃんは付き合っているってメールで百件送らないと不幸な目に会います。

麦わら帽の海賊：後ルフィとかんこくは付き合っているってメールで百件送らないと石にされます。

銀色の侍：その上石にされた後、頭部分がマミられるので注意して下さい。この記事を見た私の友人は行方不明になった後、石となって発見されました。しかも頭部分がマミられていました。

この記事を見たバカ共は・・・

「「「「マジでかアアアアアアアアアアアアアア！？」」」」

「「」」

誰もが驚いていた。

一方ハヤテの方は自室のベッドの上で横になっていた。

「告白するって決めたけど・・・いつにするか・・・」

「誰に告白するんです？」

いきなり後ろからマリアの声が聞こえた。

「ま・・・マリアさん！」

「そんなに驚かなくても・・・それよりハヤテ君、誰に告白するんですか？」

今の呟きを聞かれていたようだ。何を言ってもマリア相手じゃ駄目なのでハヤテは今の心境を語った。

「実は・・・気付いたんです・・・」

ハヤテはナギに恋心があるという事をマリアに伝えた。マリアはナギがハヤテに好意を向けているという事に気づいていた。だがハヤテ自信がナギに好意があるという事は知らなかったので驚いた。しかし、マリアはあの事が頭にあった。

「・・・ハヤテ君。実はお話があります。」

「え？」

しばらく間を開けた後、マリアはハヤテにこう語りかけた。

「実は・・・あの子・・・ずっと前からある事で勘違いしているのよ。」

「勘違い？」

「ええ・・・実は・・・私知ってるんです。あなたがナギをさらう

為にあんな事を言ったのを。」

その台詞を聞いたハヤテは固まった。

「……知ってたんですか……」

「ええ。」

「じゃあ……まさかお嬢様はあの頃から……」

「あなたに好意を向けていました。」

話を聞いたハヤテは黙ってしまった。

「……ハヤテ君。」

「マリアさん、お嬢様は……許してくれるでしょうか？」

「え？」

ハヤテの質問にマリアは頭の上に？マークが浮かんだ。

「明日、お嬢様に告白します。本当の僕の気持ちを、お嬢様に伝えます。」

「……そう。」

小さくこう言った後、マリアはハヤテを見てこう言った。

「あなたの本当の気持ち……伝わるといいですね。」

そう言っただけでマリアは部屋から出て行った。

（お嬢様に伝わるだろうか……僕の気持ち……）

心の中でハヤテは小さく呟いたのであった。

第33話：告白〜前日〜（後書き）

おまけコーナー

銀風「ついに！！ついに次回！！最終回です！！」

マリア「ハヤテ君の告白は成功するか？」

新八「ナギちゃんに思いは通じるか？」

高杉「過去の事をどうするか？」

銀風「すべて解決します…次回！！楽しみにしてください！！」

最終回：桜舞う告白（前書き）

銀風「はい！！今回で恋物語、最終回です！！」

高杉「どうなるか見てくれよな！！」

最終回：桜舞う告白

白皇学院はこの日三学期の終業式である。ハヤテはこの日にナギに告白しようと考えていたのだ。そんな時。

「ええっ……？告白が成功する桜〜？」

こんな声が聞こえたのだ。

「そうそう、実はこの学校に告白が高い確率で成功するという桜があるのよ！」

「何か先輩達から聞いたんだけど結構成功してるみたいだよ！だけど桜が満開の時にしか効果ないけどね。」

その話を小耳にはさんだハヤテはこう決心した。この場所でナギに自分の想いを伝えようと。だがハヤテの他にも何名かその話を聞いていた。しばらくしてチャイムが鳴った。

「はい、テメーら、さつさと席つけ。」

ハヤテ達の担任は雪路であるがこの声は雪路の声ではなかった。

この声は……

「はい今から銀八先生の朝のHRが始まるぞこのヤロ〜。」

「銀さん！」

白衣を身に包んだ銀時だった。

「ちょ、何やってるのだ！」

「銀さんが来るなんて聞いてないわよ！」

ナギとヒナギクはまさかの訪問者に驚いた。しばらくして銀時は訳を話した。

「実はよ〜。昨日居酒屋でオメーんとこのネーちゃんと会って飲みまくったんだよ。それでオメーのネーちゃんが二日酔いで今日学校これねーから俺が変わりに出るって言われてよ〜。」

「お姉ちゃん……」

ヒナギクは自分の姉のマダオっぷりに呆れていた。

「はいっーわけだね、今日は何か終業式っぽいから勝手に式やって

勝手に帰れ。俺ジャンプ読んでるから。はい、という訳でかいさーん。」

「……もうちょっと真面目にやれ……………」

教室内でシャウトが響いた。

あつ、という間に終業式後。ナギはハヤテの所に近づいて行った。
「なあハヤテ、ちょっと噂のサクラの所へ行かないか？」

「ええ、実は僕もお嬢様に話したい事があったので……丁度良かったですね。」

二人はその後、あの桜の元へ向かった。その様子を見ていたヒナギクは……

「ま……まさか……ナギ……もしかして……」
かなり動揺していた。

「あゝちよつと頭くらくらするな。」

廊下の方で銀時が頭を抱えて歩いていた。それに目をつけたヒナギクは銀時に話しかけた。

「ちよつと銀さん、話があるんだけど。」

「何？……っておわ！目エ怖ッ！！」

その時のヒナギクの目はかなり怖かったらしい。

一方ハヤテとナギの方は急いで桜の元へ向かっていた。

「ちよ！ちよつと待って下さいお嬢様！」

「早くするのだ！早くお前に言いたい言葉があるんだよ！」

「僕もそうですけど……っておわ！危なかった……階段からこける所だった。」

ハヤテがそう言ったその時だった！

「待てエエエエエ！！綾崎イイイイイ！！」

後ろからあの男の声がしたのだ。もちろんこの声の主はハヤテ大好き（ブラックカイン！）男、虎鉄である。

「俺と一緒に桜の木で——」
「オラアアアアアア！」
ハヤテは無言無言にその（ヒーハー！！）男をブツ飛ばした。
「グバアアアアアア！」
ブツ飛ばされた虎鉄は何故か後ろにいたヒナギク達を巻き込んで
後ろにぶつ飛んで行った。

「はぁ・・・はぁ・・・もういないよな・・・」

「そうみたいです。」

その時だった！

「おい、待てやそのバカッブル。」

「だ・・・誰？」

前から声が出た。その声の主は銀時だった。

「ぎ・・・銀さん！」

「わりーな、オイナギ、ハヤテを置いて帰れ。」

「・・・いやだ！」

「仕方ねーな。ほんじゃあ力づくでも」

「おらアアアアア！」

ナギは思いつき銀時の急所を蹴った。

「イギヤアアアアア！」

銀時は悲鳴を上げながら床を転げ回った。

「今のうちに行こう！」

「はい！」

そう言っ二人は廊下を走って行った。しばらくして銀時がこう
呟いた。

「最終回でもこんな扱いかよ・・・」

何とか妨害を潜り抜け、二人は桜の木の前に到着した。

「やっと着いたな・・・で言いたい事って何だ？」

「・・・お嬢様・・・あなたに一つ謝りたい事があります。」

そう言つてハヤテはナギに話を始めた。

「あの日・・・僕はお嬢様にある言葉を言いました。」

「何だそれ？」

「・・・一年前のクリスマスの・・・」

「あ・・・あれ・・・」

あの事を思い出したナギは顔が真っ赤になった。

「あの言葉は・・・」

少し間をおいてハヤテは話を続けた。

「・・・お嬢様をさらう為に言つた言葉です。」

「・・・え・・・」

ナギは目の前が真っ白になりそうだった。だがハヤテはナギの目を見て話を続けた。

「あの頃は・・・何もかもが最悪でした。親が僕をヤクザに売り飛ばしたりされて・・・本当に最悪でした・・・ただどなたに会つて・・・とても毎日が楽しいです。ありがとうございます。」

「・・・言いたい事はそれだけなのか？」

「え？」

ハヤテの話が終わつた後、ナギはハヤテに詰め寄つた。

「次は私がお前に話をする番だが・・・いいのか・・・」

何故かナギの顔は少し赤くなつていた。

「お嬢様も何か・・・」

「・・・何だよ！じっくり私の顔を見るな！」

照れながらナギはこう叫んだ。しばらくした後、ハヤテは口を開いた。

「じゃあ・・・僕が先に行つてもいいですか？」

「むむ・・・だったら・・・これはどうだ？お前と私が言いたい事を同時に言つて・・・」

「そうだな・・・それでやろう。」

そう会話を交わした後、ハヤテとナギは互に見つめあつて同時にこう言つた。

「「あなたが好きです。」」

言葉を放った瞬間。二人の周りに風が吹き、桜の花びらが二人を包んだ。まるで二人を祝福するかのように。

「お……お嬢様——」

「ま……まさかハヤテも——」

告白し終わった後、二人の顔は真つ赤に染まっていた。

「あの……こういう時って……どうすればいいんでしょうか？」

「わ……私に聞くな！何か恥ずかしいではないか。」

しばらくの間、二人は黙っていた。一体どうすればいいのか分からないのだ。

「えと……どうしましょう？」

「だから私に聞くなよ。」

「と……とりあえずお屋敷に戻ります？」

「む……むう……」

その後、ナギはハヤテの所に向かって抱きしめた。

「ええっ！ちょ……お嬢様！」

「べ……別にいいではないか……」

「……だったら。」

「え？ふわあっ！」

ハヤテはナギをお嬢様だっこした。

「こうやって帰りますか？」

「バカ！恥ずかしいはないか！……でも……今日ぐらいは……」

「

そんな話をしていたら何者かの視線を感じた。

「「だ……誰だ！」」

二人は後ろを向いた。そこにいた者とは！

「最終回なので・・・ずっと桜の下でスタンバっていました。」
その声の主は桂だった。

「オイヅラア！！お前何言ってるアルか！！」

「せっかくいい雰囲気だったのに何壊してんのよ！！」

桜の後ろで神楽とナミの声が聞こえた。

「神楽！それにナミも！！」

「ほらっばれちゃったじゃないの。」

「本当に何やってるアルかヅラ。」

「ヅラではない！桂だアアアアア！！」

その後、新八やゾロ達が桜の後ろから現れた。

「皆！何でここに！？」

「花見してたんだよ。」

手に持った団子を食べながらルフィはこう言った。

「でもよかったなナギ。ようやくハヤテと結ばれて。」

「そうだそうだ！よし！宴だ宴だアアアアアア！！」

その後、ハヤテとナギは新八達とそのままお花見を始めたのであった。

——そして数年後、ある教会で結婚式が挙げられた。その新郎新婦はずっと仲良く暮らそうたそうです。

最終回：桜舞う告白（後書き）

裏話！！

マリア「何ですかこれ？」

銀風「最終回だからね、ちょっといろいろこの話に関する裏話を言いたいと思います」

新八「はあ」

マリア「あの、質問ですけど何でこの話を書いたんですか？」

銀風「ちよつと本格的なハヤナギ小説を書きたかったからです」

新八「どこが本格的ですか」

高杉「ラブコメ要素があまりなかったじゃねーか、ギャグばっかで」

銀風「……」

マリア「話に聞きましたけど、この話の前にちよつといろいろと試行錯誤した話を聞きましたが」

銀風「以前、同じようなハヤナギ小説を書きましたのですが……話が続かなかったので消してしまいました。ノリはこの恋物語を同じです。違うところといえば、ハヤテのごとくと関係ないキャラとして、銀魂とワンピースが出演していました、だけどプロトタイプとなったその小説では銀魂とワンピース以外に、ドラゴンボール、け

いおんキャラも存在していました」

新八「話は違うところもあつたんですか」

銀風「プロトタイプとなった話では、ナギ主点から話は進みました。それが進まなくなった原因ですけどね」

高杉「ハハハ……」

銀風「これも裏話ですけど、混沌物語でサンジと新八がハヤテの部屋のベッドの下に、TOLLOVEを隠すシーンがありました、それはそのプロトタイプで話の元となった奴を再利用しました」

マリア「結構元となつたんですね」

新八「でもこの話、長かったですよね」

銀風「ああ、結構長く続いた」

高杉「そうだん」

銀風「さて、これにて恋物語の幕を閉じたいと思います。最後まで見てくださった皆様方、本当にありがとうございました!!」

マリア「また混沌学院、混沌物語、銀魂×ハヤテシリーズで会いましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4235q/>

ハヤテのごとく！～執事とお嬢様の恋物語～

2011年8月26日03時28分発行